



施釉陶器・白色土器・畿内系土器

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2018

多賀城跡

平成31年3月26日発行

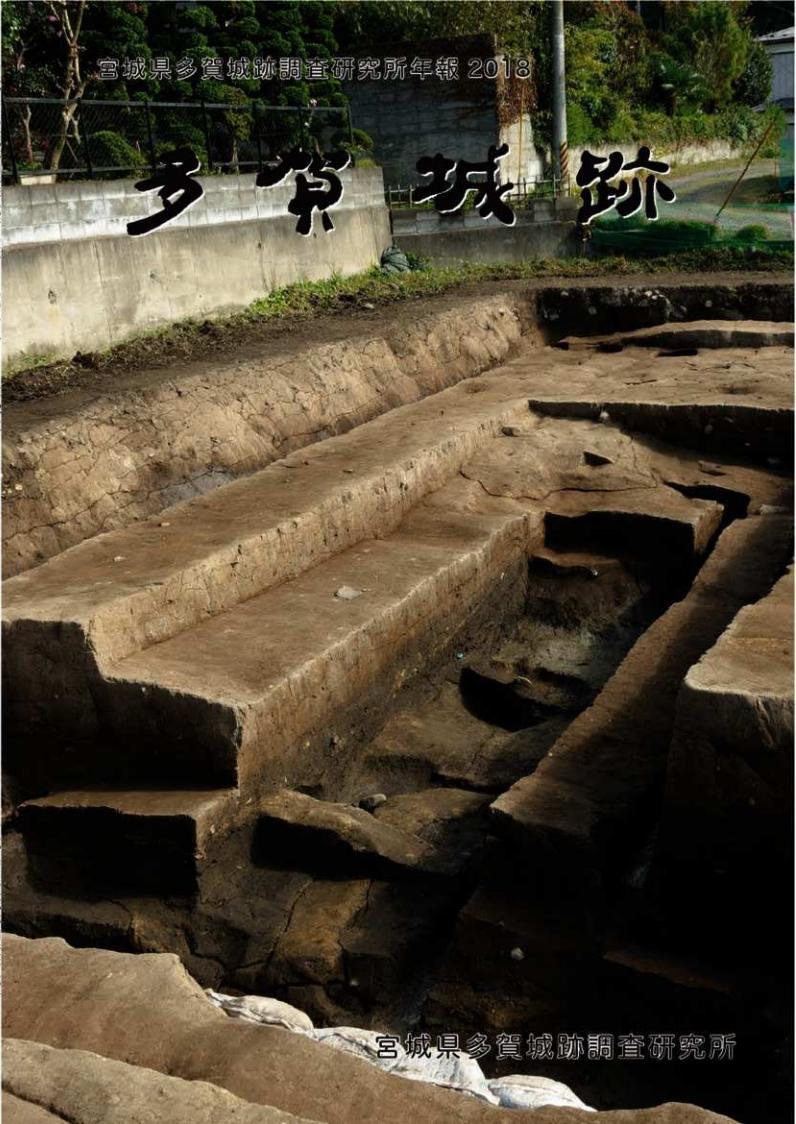
発行者 宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市高崎一丁目22-1

T E L (022) 368-0102

F A X (022) 368-0104

印刷所 株式会社 東北プリント



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

多賀城跡調査研究所は、昭和44年の開設以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施しています。その目的は、発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を解明しその成果を基に環境整備事業を実施することであり、特別史跡多賀城跡附寺跡が多くの来訪者にとって親しみやすい憩いの場、史跡公園となることを目指しています。

今年度の発掘調査事業は、多賀城跡外郭施設の確認を目的とする第10次5カ年計画の最終年度の調査として第92次調査を実施しました。今回の調査対象地は多賀城跡南西部の五万崎地区東部で、この周辺に想定される多賀城創建期南辺区画施設の延伸を確認することが主な目的でした。調査の結果、対象地内では南辺区画施設の有無を明らかにすることはできませんでしたが、対象地よりも北側に区画施設が位置する可能性が想定されました。一方、対象地の斜面堆積層から、平安初期の嵯峨天皇との密接な関係が想定される緑釉陶器輪花碗や白色土器短頸壺等が出土したことから、調査区周辺に国司が参加した儀礼や饗宴に関わる施設が存在した可能性も指摘することができ、大きな成果をあげることができました。

環境整備事業は、昨年から宮城県の総合計画である『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置づけられ、「多賀城跡創建1300年記念重点整備事業」として、西暦2024年の多賀城創建1300年の記念の年に向けて新たな事業を開始しました。政府南面地区を対象とした第10次5カ年計画の4年目の事業としても位置づけられるもので、本年度から基盤整備事業に本格的に着手しました。今後も、管理団体である多賀城市と連携し着実に推進してゆきたいと考えております。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた多くの方々に対し、所員一同感謝を申し上げます。

平成31年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 古川一明

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第92次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 調査の成果	6
3. 総括	29
III. 付章	43
1. 第10次5ヵ年計画の総括	43
2. 関連研究・普及活動	46
3. 組織と職員	50
4. 沿革と実績	51

調査要項

多賀城跡第92次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 古川一明）
調査員	古川一明・白崎恵介・村田晃一・生田和宏・村上裕次・高橋 透
調査期間	平成30年8月20日～11月30日
調査面積	約200m ²
調査参加者	市川昌曉・伊藤竜子・岡本敦子・奥 清志・鈴木和夫・鈴木幸夫・升 孝司 (多賀城跡調査研究所臨時職員) 五十嵐健太・今西純菜・花田杜綺・早川文弥(東北大大学院) 菅野雄哉・熊木奈美・洪川 駿・鈴木志保・西村優奈・松本夢人(東北大) 郷古 悠(明治大学)、小野歩実(仙台白百合学園高校)
整理参加者	佐久間順子・高橋里枝・小川由美子(多賀城跡調査研究所臨時職員)

例 言

1. 本書は、平成30年度に実施した多賀城跡の第92次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、関連研究事業、普及活動の概要等を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会での審議と承認のもとを行っている（第1表）。
3. 測量原点は政府正殿跡身倉南側柱列中央に埋標し、この原点と政府南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ $1^{\circ}04'$ 東に偏している。政府正殿と政府南門の測量基準点の平面直角座標値は東日本大震災後（平成24年）に実施した再測量の成果から以下のとおりである。

正殿	世界測地系	X座標 : -187968.3530m, Y座標 : 13560.4850m, 標高 : 32.964m
南門	世界測地系	X座標 : -188037.4930m, Y座標 : 13559.3150m, 標高 : 29.799m
4. 本書における遺構の位置の表記は、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離（m）で示している。
例：W5 = 原点から西に5m、S3 = 原点から南に3m、
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖11版』日本色研事業株式会社（1996年）にもとづく。
6. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政府跡 本文編』による。
7. 当研究所の刊行物は『多賀城跡 政府跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政府跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政府跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 外郭跡I-南門地区』を『外郭I』、『多賀城跡 政府南面地区-城前官衙遺構・遺物編』を『南面I』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』についてには『年報2010』などと記し、複数の年報の場合は『年報1983・2006』、『年報2011～2014』などと記す。
8. 本調査で得た資料は、宮城県教育委員会で保管している。
9. 本書の一部は『第92次調査現地説明会資料』、『平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料』等で紹介しているが、本書の内容が優先する。
10. 本書は所員で討議と検討を行い、Iを生田和宏、IIを生田、村上裕次、高橋透、IIIを白崎恵介、村田晃一、生田が執筆し、全体は生田が編集した。

【表紙墨字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真：調査区を西より撮影】



調査区全景（南西から）

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで5ヵ年計画を立案して行っている(第1・2表)。近年は東日本大震災による県内の復旧事業を優先し、事業の内容を一部変更しており、今年度は外郭施設の調査資料の蓄積目的とした多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画の5年次目の事業として第92次調査、政庁南面地区を本格的に整備する環境整備第10次5ヵ年計画4年次目の事業として同地区南半の基盤整備を実施した。

以下、本書では主に第92次調査の概要を記すとともに、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

氏名	所属	専門分野
委員長 佐藤 信	東京大学大学院名誉教授	古代史学
副委員長 阿子島 香	東北大学大学院教授	考古学
委員 小野 健吉	和歌山大学教授	庭園史学
委員 熊谷 公男	東北学院大学名誉教授	古代史学
委員 黒田 乃生	筑波大学教授	造園学
委員 櫻井 一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委員 鈴木 三男	東北大学大学院名誉教授	植物学
委員 藤井 恵介	東京大学大学院名誉教授	建築史学
委員 古瀬奈津子	お茶の水女子大学基幹研究院教授	古代史学
委員 松村 恵司	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	考古学

第1表 多賀城跡調査研究委員会委員(任期:平成29年4月1日~平成31年3月31日)

年度	次数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成26年	87次	外郭南辺(田屋場・坂下地区)	910m ²	外郭南門・南辺の検討
平成27年	88次	外郭南辺東半(立石地区)	390m ²	外郭南辺の検討
	89次	政庁南大路(城前地区)	280m ²	政庁南大路の補足調査
平成28年	90次	外郭南辺西半(坂下地区)	430m ²	第I期外郭南辺の検討
平成29年	91次	外郭南門(田屋場地区)	720m ²	南北大路の検討
平成30年	92次	外郭南辺(五万崎地区)	200m ²	第I期外郭南辺の検討

第2表 多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画(実績)

II. 第92次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

第92次調査は公有地化が進展した五万崎地区において、政庁第I期外郭南辺の調査が可能になつたことから実施したものである。

政庁第I期の外郭南門・南辺は、第74次調査で従来の南門よりも北の政庁南大路上において新たに門跡が発見されたことを契機とし(『年報2003』)、その後の再検討と調査を経て、南側の政庁第II期以降の南門・南辺よりも約120m北側に位置したことが判明している(『外郭I』)(図版1)。南辺東半の区画施設については、低地では材木塀、南東隅と南門跡東側に隣接する丘陵では積土遺構となることを確認し(『年報1981・1982・2006・2007』)、後者は築地塀の可能性があるとした。一方、西半については、南門跡西側に隣接する坂下地区の「鴻ノ池」と通称される沢地で行った第81・86次調査で材木塀やその基礎地業(『年報2009・2013』)、第90次調査で積土遺構を検出し(『年報2016』)、南門から約100m西の地点までの状況が判明した。一方、それよりも西側の丘陵部分については、延長部分に当たる第84次調査では検出されず、状況は不明である。ただし第84次調査区北端で、土取り穴と推定される土壤群が検出され、南辺は第84次調査区の北側に存在する可能性が考えられた(『年報2012』)(図版2)。

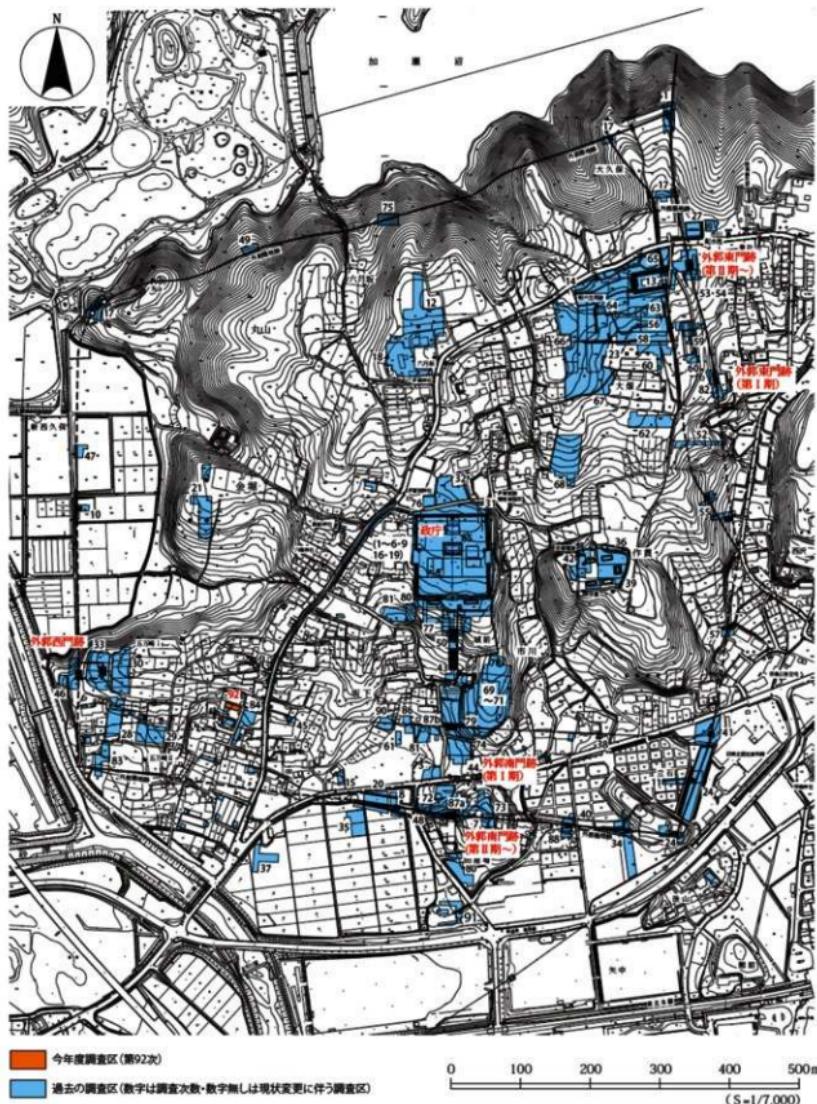
そこで、第84次調査区の北西側に調査区を設定し、政庁第I期外郭南辺の延長とその規模・構造を確認すること、さらに、五万崎地区東部の遺構の分布や変遷を把握することを目的として本調査を行つた。

(2) 調査の経過

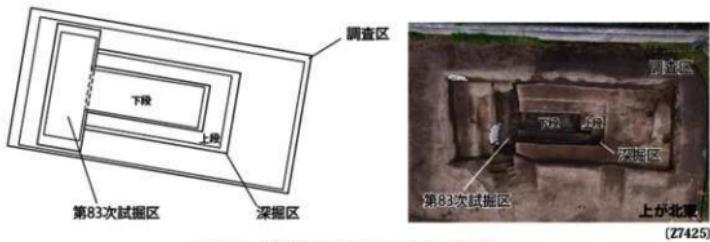
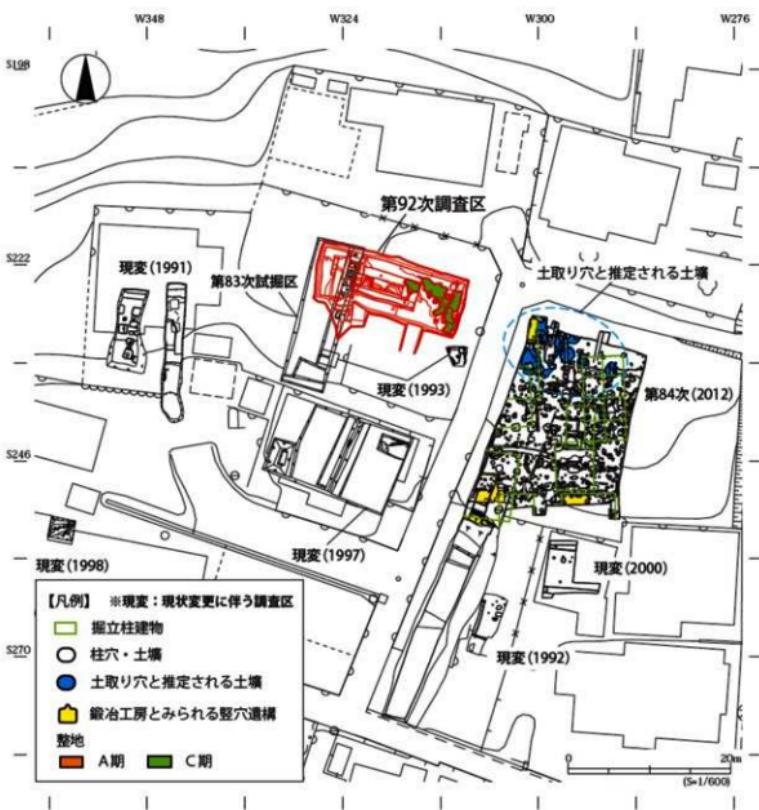
五万崎地区と調査区の位置：五万崎地区は政庁南西に位置し、調査区は城外南西の砂押川に架かる市川橋から六月坂地区、大畠地区を経て外郭東門に至る尾根筋の市道市川線(旧塩竈街道)西側の宅地内に位置する。

調査では、2011年度の第83次調査の期間中に実施した試掘調査西トレント(『年報2011』、以下第83次試掘区とする)と一部を重複させた調査区を設定した(図版2・3)。これは、政庁正殿の多賀城原点からは南に219～231m、西に306～326mの位置にあたる(図版1・2)。

調査の経過と方法：8月20日から調査を開始し、重機により近現代の表土・盛土(第I層)と、第83次試掘区の埋め戻し土を一部除去した。9月6・7日に人力での精査を行い、調査区東側で整地層と柱穴群、中央から西側で沢の堆積土を検出した。9月11日から20日には第83次試掘区の埋め戻し土を全て除去し、遺構の再精査と第83次試掘区路面の観察から遺構面の有無や層の堆積状況の検討を行つた。その結果、検出面から地山までは約1.8mあり、その中に沢の堆積土とともに複数の遺構面があることを確認した。そのため、調査区の平面的な精査においては控えを十分に確保して階段状に



図版1 調査区の位置



掘り下げていくこととし、調査区中央部で、第83次試掘区に直交する東西7.6m、南北3.6mの深掘区を設定した（図版3）。

9月20日から深掘区の精査を開始した（図版4-1）。多くの遺物が出土したが、中でも、10月12日に宝相華文が陰刻された縁軸陶器輪花塊の同一個体の破片がまとまって出土したことは特筆される。10月15日には整地層とその下層の沢堆積土上面を検出し、これらを上層（C期）遺構面として写真記録を作成した。10月16日からは、さらに深く掘り下げるため、深掘区の中央部分に東西5.6m、南北1.4mのトレンチを設定し精査したところ、C期の遺構面から複数の沢の堆積土を挟み、浅い部分で0.2m、深い部分で0.7m下から溝や土壌を検出した。したがって、これらを中層（B期）遺構として、精査、記録作を行った。さらに精査を継続し、10月22日には、地山や旧表土直上で整地層、それを掘りこむ溝、土壌、柱穴を検出したため、これらを下層（A期）遺構とした。これらの遺構検出において区画施設の有無を検討したが、その痕跡は認められず、政府第I期南辺については、本調査区では認められないことが判明した。その後図面作成、断面観察等の補足調査を行い、11月21日には遺構の精査と記録作成を終了した。11月27日から調査区の埋め戻しを行い、11月30日に調査の一切が終了した。

検出した遺構についてはデジタルカメラで撮影し、空中写真撮影にはドローンを使用した。平面図、断面図については、縮尺1/20で作成している。図面の作成にあたっては五万崎地区に埋設された「五万崎IX」、「五万崎I」の基準点を用いた。検出した遺構については3371番から遺構番号を付している。

調査期間中の10月30・31日には多賀城跡調査研究委員会を開催して調査成果に関する指導と承認を受けた。それを踏まえて11月1日に調査成果を報道機関に公表し、11月3日には現地説明会を開催した（図版4-2）。説明会の当日は晴天に恵まれ、95名の参加者を迎えて発見した遺構と遺物について説明を行った。調査終了後の12月8日には平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会、平成31年2月16日には第45回古代城柵官衙遺跡検討会でも成果の概要を報告した。なお、9月25日から10月3日にかけては、東北大学連携大学院考古学実習の一環として10名の東北大学生が、8月23日から28日には明治大学生、9月28日には仙台百合学園高校の生徒が調査に参加している。



1. 調査状況

[Z7484]



2. 現地説明会のようす

[Z7481]

図版4 調査・一般公開の状況

2. 調査の成果

(1) 基本層序 (図版 5~10)

調査区が位置する五万崎地区の地形は、北東から南西に延びる丘陵尾根とその斜面、そして南から入る沢によって構成されている。第92次調査区は、その沢の沢頭部分に当たり、現地形は宅地造成の際に平坦に盛土されているが、旧地形は北・東の丘陵から傾斜する斜面である。標高が高い調査区東端では表土直下に整地層が検出されたが、それ以外の広範囲では沢を埋積した土砂が確認され、標高の低い南西側では旧地形を反映して厚く堆積している。地山面の標高は、最も高い調査区北東隅で10.4m、最も低い南西部で8.4mであり、両者には2mの高低差がある。基本層序は、埋め戻し土・造成盛土(第Ib層)を除くとすべて自然堆積層で、4層に大別した。以下、各層の特徴を記述する。

【第I層】現代の表土・造成土・耕作土・第83次試掘区埋め戻し土で、厚さは0.1~1.9mである。

a~cに細分できる。a層は表土、b層は第83次試掘区埋め戻し土・造成盛土、c層は造成前の表土とみられる。

【第II層】沢の堆積土で、調査区全面で検出した。堆積土中から多量の遺物が出土したことから SX3382沢跡として遺構登録した。12層に分け、33層に細分した。各層の分布は、1・2層が調査区南半、3・4層が調査区西半、5a・c~e層が深掘区、5b層が第83次試掘区よりも東側、6a・b層が調査区西端、6c層が調査区全域であり、7層以下は精査した範囲が限定的であったことから、深掘区と第83次試掘区のみである。

1層：黒褐色(10YR3/2)シルトである。厚さは10~35cmである。

2層：褐色(7.5YR4/6)シルトである。厚さは10~30cmである。

3層：3a~3l層に細分した。炭化物粒・片を多量に含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトである。厚さは10~50cmである。3h層最下部で灰白色火山灰(To-a)粒を確認した。

4層：炭化物粒・片を多量に含む暗褐色(10YR3/4)シルトである。厚さは10~25cmである。

5層：5a~5e層に細分した。炭化物粒・片を多量に含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトである。厚さは10~20cmである。

6層：6a~6c層に細分した。炭化物粒・片を少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。厚さは10~80cmである。6c層の直上にSX3379整地層が載ること、6a・b層とSX3379とは分布範囲が異なり直接的な関係は認められないが、6a~c層は一連の堆積土とみたことから、SX3379とSX3379が分布しない範囲における6a~c層上面をC期遺構面とした。

7層：炭化物粒・片を少量含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。厚さは10~30cmである。

8層：8a・8b層に細分した。炭化物粒・片を少量含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトである。上部には酸化鉄が多量に沈着する。厚さは10~35cmである。

9層：地山粒・小ブロック・凝灰岩粒・小礫を多量に含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで

ある。厚さは10~15cmである。

10層：10a・10b層に細分した。細砂を少量含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。10b層は地山粒・小ブロック、炭化物粒・片をやや多く含む。厚さは10~30cmである。深掘区で、9層よりも古く、10a層よりも新しい溝があるため、この溝の検出面をB期遺構面とした。

11層：11a~11c層に細分した。地山粒を少量含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトである。厚さは10~20cmである。

12層：細砂を含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトである。厚さは10cmである。直上にSX3371整地層が載るため、SX3371上面をA期遺構面とした。

これらは、遺構面との層位的関係から1~5層、6~9層、10層、11・12層の4層に大別できるので、それぞれSX3382大別1~4層とまとめた。

【第III層】黒褐色(10YR2/2)シルトで古代の旧表土である。調査区北東隅と深掘区で確認した。

【第IV層】凝灰岩の小礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト、黄橙色(10YR6/4)粘土の地山である。

(2) 発見遺構と出土遺物

遺構は、整地層、溝、土壤、柱穴がある。これらは前述したA~C期の遺構面で検出したため、以下では、「A期遺構」、「B期遺構」、「C期遺構」として概要を記述する。基本層序等の遺構以外から出土した遺物については、特筆すべき資料に限って取り上げる。

1) A期遺構

整地層1、溝2、土壤2、この他に組み合わない柱穴3がある。

【SX3371整地層】(図版5~7、第3表)

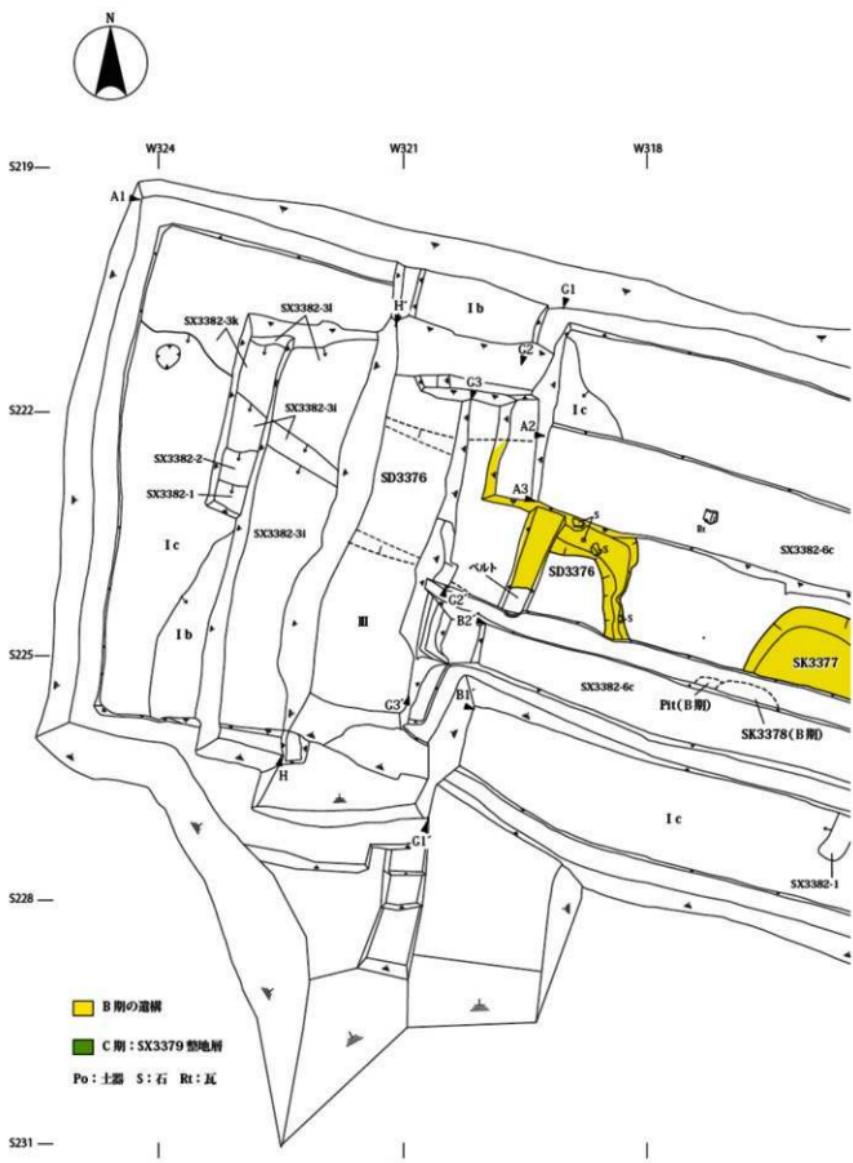
深掘区下段と第83次試掘区で検出した。標高の高い北・東側の旧表土と地山を削り出し、標高の低い南・西側のSX3382-12層と地山に盛土して平坦面を造成した整地層で、分布は南・西側へ広がる。SD3372・3373・3376溝、SK3374・3375・3377・3378土壤、P1より古い。検出した範囲は南北2.1m以上、東西4.1m以上で、厚さは最大0.2mである。盛土は2層に細分できる。1層は地山ブロックを多量に含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト、2層は暗褐色シルトブロックを多量に含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。

遺物は非クロロ整形の土師器壺、須恵器甕、平瓦、鐵鎌(図版11-4)が出土している。

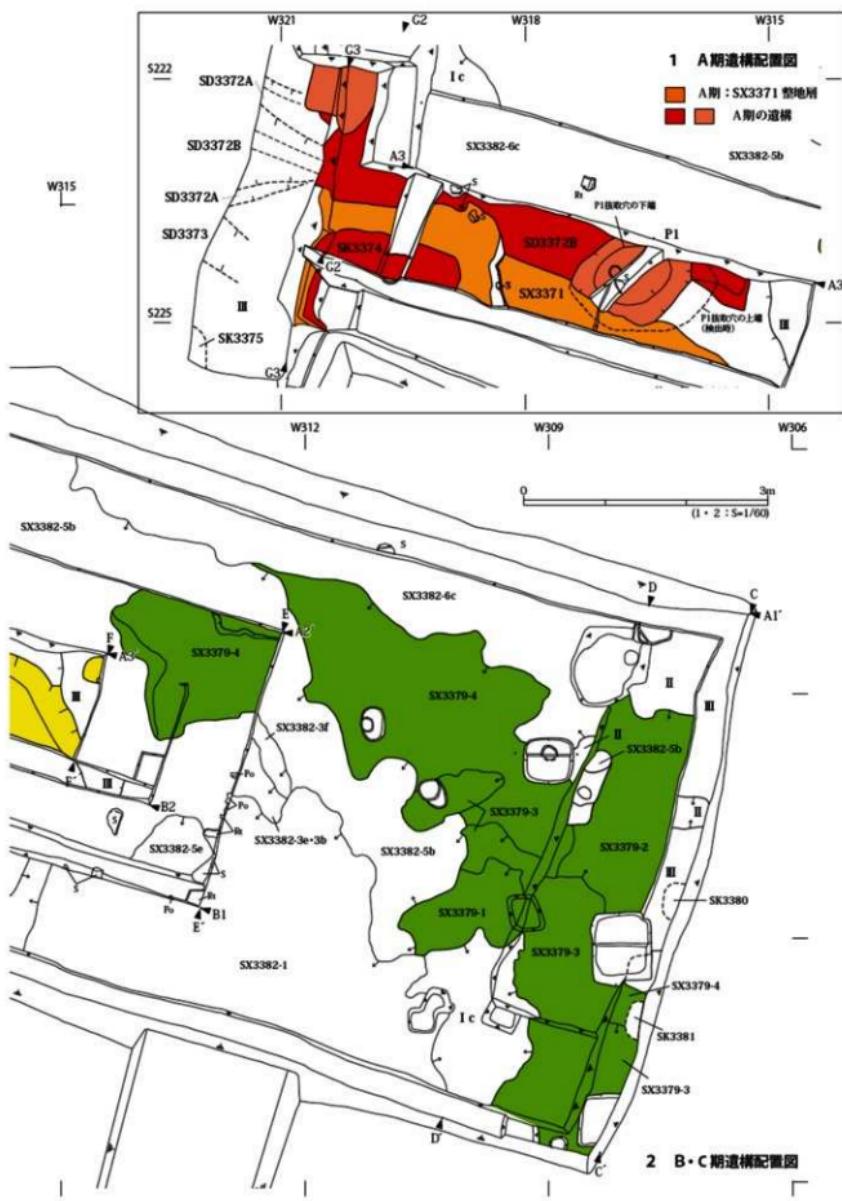
【SD3372溝】(図版5~7、第3表)

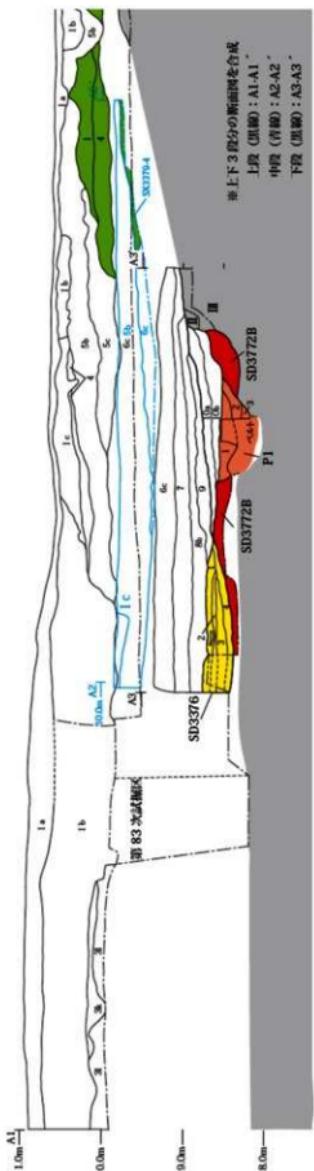
深掘区下段から第83次試掘区のSX3371整地層上面で検出した東西方方向の溝である。南西方向に傾斜する地山の斜面から西へ延びる。溝の東端は、標高の低い南側に屈曲する可能性があるが、SK3377土壤と重複しており確認できていない。SD3376溝、SK3377土壤、P1より古い。検出長は6.6mで、方向は東西の発掘基準線に対し、東で南に15°振れる。1度掘り直されている(A→B)。

Aの規模は上幅0.5m以上、下幅0.3m以上、深さ0.3mで、断面形は逆台形とみられる。堆積土は、

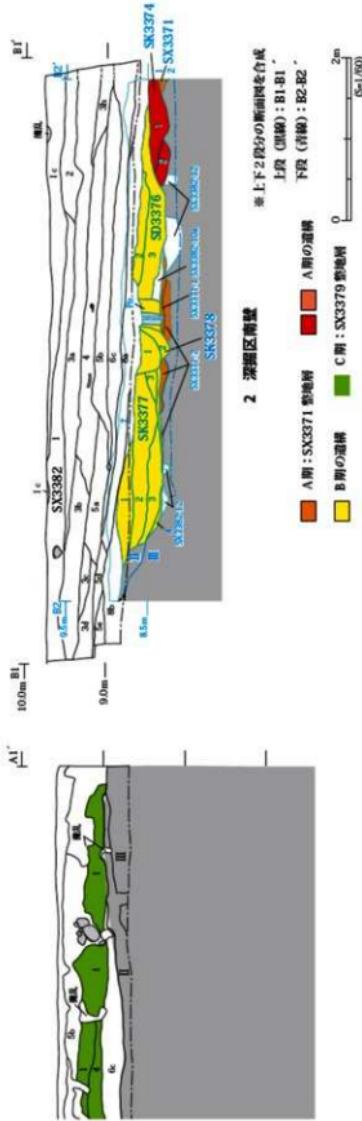


図版5 遺構配置図

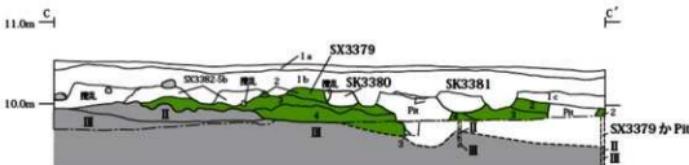




1 調査区北縁



図版6 調査区北壁・南壁断面図



1 調査区東壁



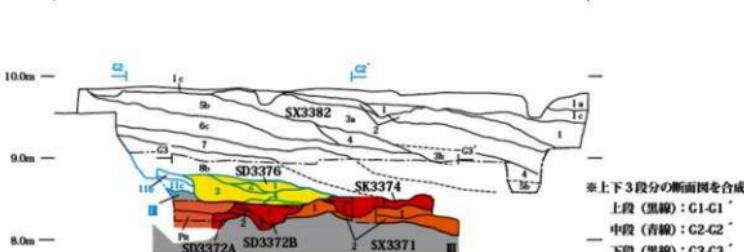
2 SX3379 整地層断面図



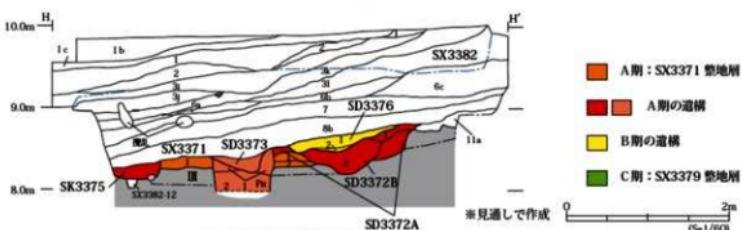
3 深掘区上段東壁



4 深掘区下段東壁



5 第83次試掘区東壁



6 第83次試掘区西壁

図版7 調査区東壁・西壁等断面図



1 調査区全景（南西から）

[Z7452]



2 A期全景（上が北東）

[Z7425]



3 A期全景（西から）

[Z7397]



4 C期全景（上が北東）

[Z7428]



5 C期全景（西から）

[Z7409]

図版8 調査区全景



1 北壁（南東から） [Z7390]



2 深掘区中・下段北壁（南西から） [Z7396]



3 深掘区中・下段南壁（北東から） [Z7403]



4 東壁（南西から） [Z7377]



5 東ペルト断面（北西から） [Z7373]



6 深掘区上段東壁（南西から） [Z7407]



7 深掘区下段東壁（南西から） [Z7401]



8 第83次試掘区上段東壁（北西から） [Z7364]

図版9 調査区断面（1）



1 第83次試掘区東壁（西から） [Z7397]



2 第83次試掘区西壁（北東から） [Z7366]

図版10 調査区断面（2）

地山ブロックをわずかに含む黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

Bの規模は上幅1.8m以上、下幅0.2m、深さ0.6mで、断面形は上端が開くU字状である。堆積土は2層に分かれ、1層は地山ブロックをわずかに含む暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘土質シルト、2層は地山ブロックと炭化物粒を少量含む黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物はA・Bから非クロロ整形の土師器壺・盤・甕、須恵器甕が出土している。

【SD3373溝】(図版7)

第83次試掘区西壁の断面で確認した東西方向の溝である。東壁では、第1b層が残存しており確認できない。SX3371整地層より新しい。検出長は1.3mで、方向は東西の発掘基準線に対し、東で北に10°振れる。規模は上幅0.8m、下幅0.2m、深さ0.2mで、断面形は上端が開くU字状である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK3374土壤】(図版5～7、第3表)

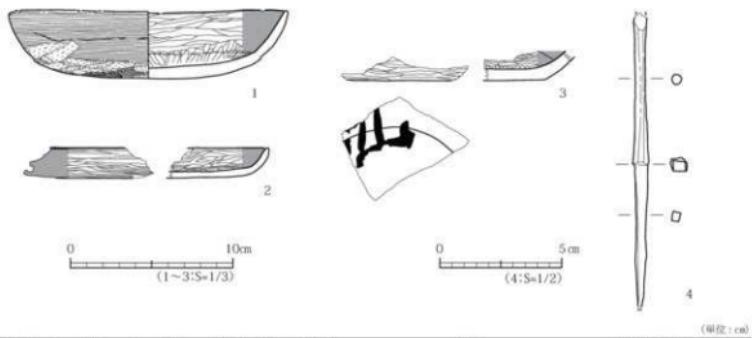
深掘区下段の南西隅のSX3371整地層上面で検出した土壤である。南・西側へさらに広がるため平面形は不明である。SD3376溝より古い。規模は東西1.1m以上、南北0.5m以上、深さ0.2mで、底面には緩やかな凹凸がある。1層の地山ブロック・炭化物粒・黒褐色粘土質シルトブロックを多量に含む黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトと、2層の地山粒・炭化物粒を少量、暗褐色シルトブロックを多量に含む黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は非クロロ整形の土師器壺（図版11-1）・盤（2）・壺・甕、須恵器甕が出土している。

【SK3375土壤】(図版7)

第83次試掘区の西壁断面で確認した土壤である。北辺のみ確認し、南・西側にさらに広がる。SX3371整地層より新しい。平面形・規模は不明である。堆積土は地山ブロック・炭化物粒をわずかに含む黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。



図版11 A期遺構の出土遺物

[P1柱穴](図版5・6、第3表)

深掘区下段のSX3371整地層とSD3372溝の堆積土上面で検出した柱穴で、北側へさらに広がる。柱抜取穴、柱痕跡、掘方埋土を確認した。SK3371土壤より古い。抜取穴のみ精査し、柱穴の截ち割りを行っていない。掘方は一辺1.2mの隅丸方形とみられる。埋土は地山小・中ブロックを多量に含む褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトである。柱痕跡は径15cmの円形で、堆積土は地山小ブロックを少量含む黒褐色(10YR3/2)粘土である。抜取穴は長軸1.5m、短軸1.2m以上の不整円形で、地山小・中ブロックを少量含む褐灰色(10YR4/1)・灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は抜取穴1層から非ロクロ整形の土師器壺・甕、須恵器甕、抜取穴2層から非ロクロ整形の土師器壺・盤・短頸壺・甕、須恵器壺、円面硯(図版18-4)、獸骨、モモ核が出土している。土師器壺には、外面の体下部から底部に墨書きされたものがある(図版11-3)。

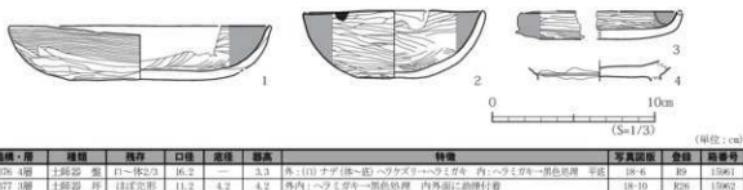
2) B期遺構

溝1、土壌2、この他に組み合わない柱穴2がある。

[SD3376溝](図版5~7、第3表)

深掘区下段から第83次試掘区で検出した東西方向から南北方向に屈曲する溝である。深掘区の下段南壁でSX3382-10a層より新しく、北壁ではSX3382-9層に覆われる。SX3371整地層、SD3372溝、SK3374土壤より新しい。検出長は3.2mで、規模は上幅1.4m、下幅0.4m、深さ0.4mである。断面形は皿状で、底面からの立ち上がりは緩やかである。底面の一部は流水により筋状に窪む。堆積土は大きく上下の2層に分かれ、上層(1・2層)は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、下層(3・4層)は細砂を多量に含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は下層から非ロクロ整形の土師器壺・盤(図版12-1)・蓋・甕、須恵器甕、平瓦、獸骨、上層



図版12 B・C期遺構の出土遺物

から非クロロ整形の土師器壺・盤・甕・瓶、須恵器壺・甕、平瓦、丸瓦ⅠA・Ⅱ類、転用砥、鹿角(図版18-9)、獸骨が出土している。内外面が黒色処理された土師器壺の体部外面には、焼成後に「大」あるいは「才」とへら書きされたものがある(図版18-7)。また、須恵器甕には、胴部内面に漆が付着しているものがある(図版18-8)。

【SK3377土壤】(図版5~7、第3表)

深掘区下段で検出した土壤で、南側へさらに広がる。土壤東側では旧表土と地山を掘り込んでいる。SK3371整地層、SD3372溝より新しく、SK3378土壤より古い。平面は円形とみられ、規模は東西2.4m以上、南北1.0m以上、深さ0.5mで、断面形は逆台形とみられる。堆積土は大きく上下の2層に分かれ、上層(1~3層)は地山ブロック・炭化物を少量含む黒褐色(10YR3/2・1/3)粘土質シルト、下層(4層)は有機質を多量に含む黒色(10YR2/1)シルト質粘土で、自然堆積である。

遺物は上層から非クロロ整形の土師器壺(図版12-2)、下層から木製品燃えさし、上下層から非クロロ整形の土師器壺・高台壺・盤(3)・蓋・甕、須恵器壺・蓋・長頸瓶・甕、転用砥、重弧文軒平瓦(型式不明)、平瓦ⅠA・ⅡA類、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、円盤状土製品、獸骨が出土している。須恵器壺・甕(図版18-12)には内面に漆が付着したものがある。

【SK3378土壤】(図版6)

深掘区の下段南壁の断面で確認した土壤で、南側へさらに広がる。SK3377土壤より新しい。平面形は不明で、規模は東西0.6m、深さ0.5mである。断面形はU字状である。堆積土は2層に分かれ、1層は地山ブロック・炭化物粒を少量含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、2層は地山ブロック・炭化物粒をわずかに含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

3) C期遺構

整地層1、土壤2、この他に組み合わない柱穴9がある。

【SX3379整地層】(図版5~7、第3表)

調査区東端から深掘区の上段北東隅で検出した整地層で、調査区北・東・南東側へさらに広がる。調査区北東隅では旧表土上、それ以外の範囲ではSX3382-6c層上に盛土されている。SK3380・3381土壤より古い。検出した範囲は東西7.5m、南北5.8m、厚さは最大0.5mである。盛土は4層に細分され

る。1層は地山粒・小ブロック、凝灰岩粒・小礫を多量に含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト、2層は地山粒・小ブロック、黒褐色・灰黄褐色砂質シルト小ブロックを多量に含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルト、3層は地山粒・小ブロックを多量に含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、4層は地山粒・小ブロック・凝灰岩粒・小礫を多量に含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。

遺物は非ロクロ整形の土師器坏・壺・甕、須恵器坏・甕、遺構確認面から越州窯系青磁碗(図版12-4)が出土している。

【SK3380土壤】(図版7)

調査区東壁の断面で確認した土壤で、東側へさらに広がる。SX3379整地層より新しい。平面形は不明で、規模は南北0.4m、深さ0.2mである。断面形は上端が開く逆台形である。堆積土は地山ブロック・凝灰岩小礫・炭化物粒・焼土粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK3381土壤】(図版7)

調査区東壁の断面で確認した土壤で、東側へさらに広がる。SX3379整地層より新しい。平面形は不明で、規模は南北0.6m、深さ0.2mである。断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロック・凝灰岩小礫・炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

4) 基本層序等の出土遺物

【第II層(SX3382)】(図版14~16、第3表)

大別4層(11・12層)では12層から非ロクロ整形の土師器坏・甕、製塩土器が出土した。

大別3層(10層)から土器、瓦が出土した。土器は土師器と須恵器で、土師器は非ロクロ整形の坏(図版14-1・2)・蓋・甕・瓶、ロクロ整形の坏(3)、須恵器は坏・高台坏・高坏・甕である。須恵器坏は、底部の切り離し後に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されている。また、須恵器高坏(4)には、脚部内面に「□〔十カ〕」と墨書きされたものがある。瓦は平瓦と丸瓦ⅠA類である。

大別2層(6~9層)では6c・7・8ab層から土器、瓦、土製品、木製品、金属製品、骨角器、動物遺存体が出土した。この内6c・7層から出土した土師器の多くは細片で磨耗している。

9層の遺物は、土師器、須恵器、瓦、円盤状土製品、獸骨である。土師器は非ロクロ整形の坏・盤・甕、須恵器は坏・高台坏・甕である。須恵器坏は、静止糸切りで底部が切り離された後に手持ちヘラケズリが施されている。瓦は、平瓦と丸瓦Ⅱ・ⅡB類、円盤状土製品は、両面黒色処理された土師器蓋のつまみ部を利用したものである。

8ab層の遺物は、土師器、須恵器、製塩土器、瓦、基石、楕円形瓦(図版19-2)、鉄滓、木製品燃えさし、骨角器である。土師器は、非ロクロ整形の坏・盤・蓋・鉢・甕、須恵器は坏・高台坏・蓋・甕である。須恵器坏は、回転ヘラ切りや静止糸切りで底部が切り離された後に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されている。骨角器(図版14-11)は破損しており器種等は不明だが、内外面が丁寧に研磨されている。

7層の遺物は、土師器、須恵器、瓦、不明鐵製品、鉄滓、炉壁、木の燃えさしである。土師器は

非クロ整形の坏・盤・蓋・甕、クロ整形の坏(図版14-5)・高台坏で、クロ整形の坏は底部が残存しておらず、切り离しや调整の有無は不明である。須恵器は坏・高台坏・高坏・高台盤・蓋・長頸瓶・鉢・甕で、坏には回転ヘラ切りや静止糸切りで底部を切り離した後に、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されるものと、回転ヘラ切りの後にナデが施されるものがある。瓦は、軒平瓦(511型式)、平瓦II C類か、丸瓦I A・II類であり、丸瓦II類には凸面に「匁」とヘラ書きされたものがある。

6c層の遺物は、土師器、須恵器、瓦、刀子、鉄釘、鉄滓である。土師器は非クロ整形の坏・蓋・甕、クロ整形の坏・高台坏・甕で、クロ整形の坏は、底部切り離し後に调整が施される。須恵器は坏・高台坏・双耳坏・境・稜塊・蓋・甕で、坏には、底部切り離し後に调整が施されるものと回転ヘラ切りの後にナデが施されるもの、回転糸切りのもの(図版14-6)がある。また、最终调整にヘラミガキが施された双耳坏(8)と蓋(9)や、壺G(10)、胎土の特徴から大戸窯産と考えられる甕が認められる。瓦は、平瓦I・I B・II B・II C類か、丸瓦II・II B類で、平瓦I B類にはaタイプ、II B類にはbタイプがある。

大別1層(1~5層)では、1・2層、3a・e・f・i・k・1層、4層、5a・b・e層から土器、施釉陶器、瓦、土製品、石製品、金属製品、動物遺存体が出土した(図版13)。土師器はクロ整形が主体である。土師器坏では底部切り離し後に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されるものと、回転糸切りのもの、須恵器坏では底部切り離し後に调整が施されるものと、回転ヘラ切りや回転糸切りのものが認められる。

5a・b・e層の遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、製塙土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器(平尾1994)、瓦、円面硯、土製支脚、羽口、土錘(図版20-7)、円盤状土製品、砥石、金床石(図版20-8)、碁石か、刀子、不明銅製品、鉄釘、鉄滓である。土師器は坏・高台坏・蓋・鉢・甕・羽釜形土器であり、羽釜形土器(図版15-2)は鉗部のみの出土である。須恵器は坏・高台坏・稜塊・高台盤・蓋・長頸瓶・鉢・甕である。体部外面に墨書きされた坏(図版15-1)や、焼成前の底部外面に「×」とヘラ書きされた坏、湖西産の長頸瓶(図版20-6)、大戸窯産の長頸瓶・甕(図版20-5)が認められる。須恵系土器は坏・台付鉢である。緑釉陶器は輪花塊(図版15-5)・塊(6)・皿(7)、灰釉陶器は塊(8)・皿(9)、白色土器は短頸壺(10)である。瓦は、軒丸瓦(型式不明)、軒平瓦(620型式)、平瓦I・I A・II B・II C類、丸瓦II A・II B類で、平瓦I A類にはaタイプ、II B類にはaタイプ1・2・bタイプ1がある。円面硯は脚部のみ、円盤状土製品は瓦を利用したもの、石製品(3・4)は碁石の可能性がある。

4層の遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、羽口、円盤状土製品、砥石、碁石か、刀子、椭形滓、鉄滓、炉底である。土師器は坏・高台坏・甕、須恵器は坏・高台坏・蓋・小瓶・長頸瓶・甕である。大戸窯産の長頸瓶(図版20-11)・小瓶(図版16-2)・甕(3)が認められる。須恵系土器は坏・台付鉢である。緑釉陶器は塊(4)・皿、灰釉陶器は塊(図版21-5)・皿(図版16-5)・長頸瓶(図版16-6)である。瓦は、平瓦I C・II B・II C類、丸瓦II・II B類で、平瓦I C類にはbタイプがある(図版20-13)。円盤状土製品は瓦を利用したもの、砥石(図版16-7)は凝灰岩製で、平面が方形、断面が四角形である。砥面は6面で、先端中央部のくぼみにも研磨した痕跡が認められる。

3a・e・f・i・k・l層の遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、埴、風字硯、羽口、坩堝、土鍤、砥石、刀子、鉄釘、楕形滓、鉄滓、焼骨である。土師器は壺・高台壺・鉢・甕・櫃である。削り出し高台の高台壺(10)や、底部が張り出す無底の甕(9)が認められる。須恵器は壺・高台壺・蓋・托(11)・長頸瓶・鉢・甕である。焼成前の壺の底部外面に「×」とヘラ書きされたものがある(図版21-10)。緑釉陶器は塊(図版21-11)・段皿(図版21-12)、灰釉陶器は塊(図版16-12)である。瓦は、軒平瓦(型式不明)、平瓦II C類、丸瓦II・II B類、風字硯は須恵質で、側辺部のみの出土である。羽口(13)と坩堝(14)には銅滓が付着している。砥石(15)は凝灰岩製で、砥面は6面である。

2層の遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、基石かである。土師器は壺・高台壺、須恵器は壺・高台壺・蓋・長頸瓶・甕である。須恵器甕には大戸窯産のものが認められる。須恵系土器は壺・高台壺である。瓦は平瓦、丸瓦II類である。

1層の遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、瓦、羽口、円盤状土製品、基石か、鉄釘、鉄滓である。土師器は壺・高台壺、須恵器は壺・蓋・長頸瓶・甕(図版21-19)である。須恵器長頸瓶・広口瓶(図版21-20)・甕には大戸窯産のものが認められる。須恵系土器は壺(図版16-16)・高台塊あるいは皿(17)、灰釉陶器は長頸瓶である。瓦は平瓦I・II B・II C類、丸瓦II・II B類、円盤状



1 1層：須恵器・瓦 (北東から) [Z7454]



2 5b層：白色土器 (南西から) [Z7463]



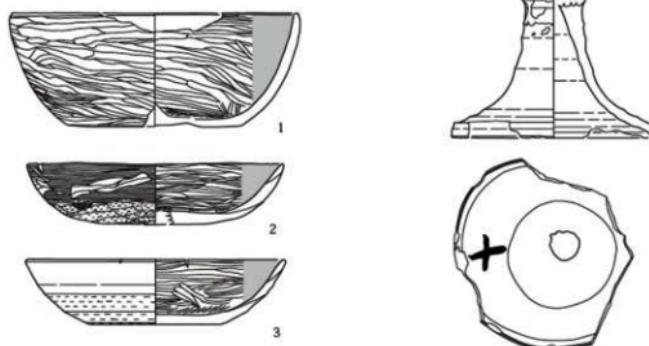
3 5b層：緑釉陶器輪花壺・須恵器・土師器・瓦 (北西から) [Z7464]



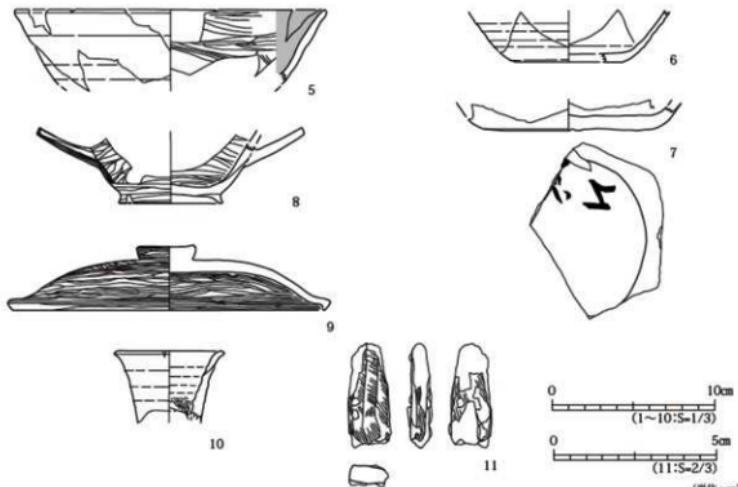
4 緑釉陶器輪花壺 (北東から) [Z7470]

図版13 SX3382沢跡遺物出土状況

10a・10b層

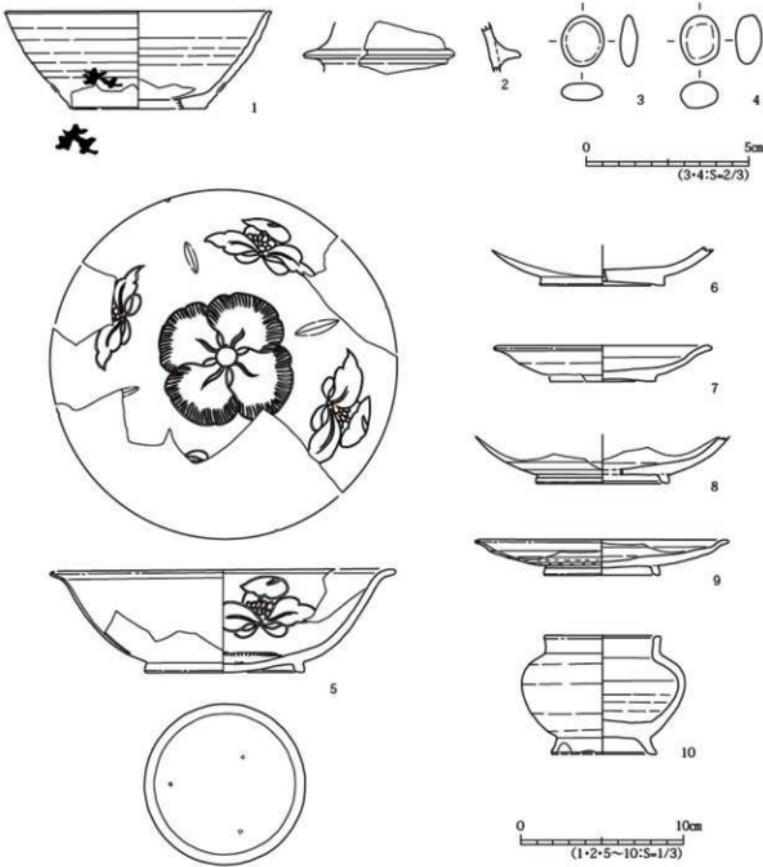


6c・7・8b層



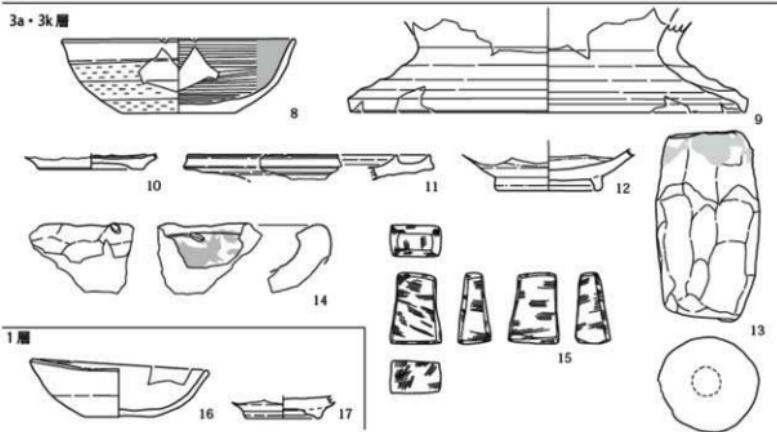
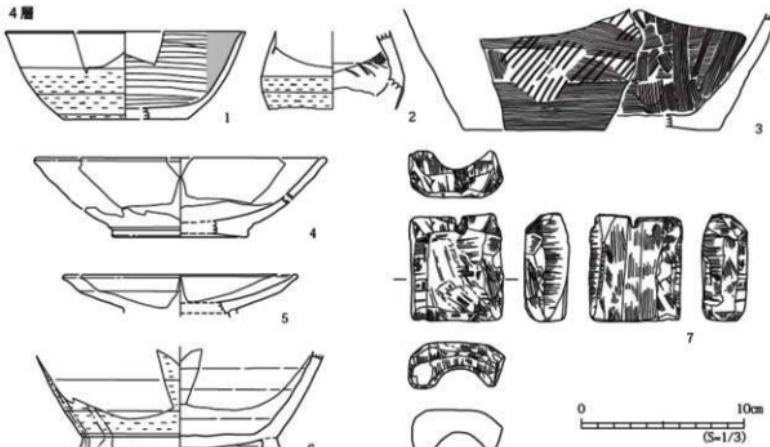
No.	層	種類	残存	口径	底径	厚さ	特徴	写真番号	盤面	高さ
1	10b層	土師器 壺	口2/5～底1/6	(12.6)	(10.7)	(7.0)	外：(口～体) ヘラミガキ (底) ハラケズリ→細いヘラミガキ 内：ヘラミガキ→黒色処理 平底	18-14	R62	15963
2	10a層	土師器 壺	口～底1/4	(15.0)	—	(3.0)	外：(口～体) ナデ～ヘラミガキ (体～底) ハケミ、ナデ～ヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黒色処理 平底気泡の丸底	18-15	R64	15963
3	10a層	土師器 壺	口～底1/2	16.0	8.0	4.0	外：ロクロナデ (底) 横方向ミガキ→黒色処理 底：切り離し不明 (体～底) ハラケズリ	18-16	R63	15963
4	10a層	京焼器 高杯	脚1/2	—	12.6	—	外：ロクロナデ 内：白泥 (底) ハラケズリ	18-17	R72	15963
5	7層	土師器 壺	口～体1/5	(19.2)	—	—	外：ロクロナデ 内：ヘラミガキ→黒色処理	19-3	R79	15963
6	6c層	京焼器 壺	体～底1/4	—	(6.0)	—	外：ロクロナデ 底：開口部切り離し黒化	19-4	R304	15964
7	6c層	京焼器 壺	底～底1/2	—	(10.4)	—	底：開口部ヘラカツリヘラゲ 底部外側に黒墨 (口上部)	19-5	R106	15964
8	6c層	京焼器 宝耳杯	体～底1/3	—	(6.4)	—	外：(底) ロクロナデ (底) 回転赤目引一高台取付→ロクロナデ 内：ヘラミガキ 内：ロクロナデ～ヘラミガキ	19-7	R119	15964
9	6c層	京焼器 壺	口2/3～底1/1	19.9	—	4.0	外：ロクロナデ～ヘラミガキ →走み、脚宝珠形	19-8	R122	15964
10	6c層	京焼器 壺	口削1/2	—	6.0	—	外：ロクロナデ 平底底分筋付C 斜面赤褐色	19-6	R125	15965
11	5b層	骨角器	先端・末端部分欠損	—	—	—	底 (3.2) 幅 (1.3) 厚 (5.0)	19-1	R574	15973

図版14 第II層(SX3382沢跡6c～10b層)出土遺物1



図版15 第II層(SX3382沢跡5b層)出土遺物2

No.	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図番	番号	番号
1	直輪器 片	口1/3～底(一部)	(16.4)	(8.2)	(6.0)	内面：クロナナズ底：回転式切り無調整 体部外面に墨書き「□」	19-9	R265	15968
2	土師器 羽釜形土器	鉢底	—	—	—	外：クロナナズ 内：土窯	19-10	R155	15965
3	石製品 磨石	完形	—	—	—	径1.5 柄1.3 厚0.5 重1.4kg 黒色	19-11	R256	15967
4	石製品 磨石	完形	—	—	—	径1.5 柄1.2 厚0.8 重2.04kg 白色 石英製	19-12	R257	15967
5	縁輪陶器 輪花焼	口1/2～底1/1	21.2	9.8	6.3	輪：口縁が小なり切欠き、外側は直輪器、内面は小切欠きで表現、貼付輪高台 輪脚花文は底部が丸頭脚半ループ花脚茎文、底部が丸頭脚向条芯花文、内側脚三足にチタン接着痕 並行底座、直輪器	19-13	R448	15974
6	縁輪陶器 地	底～底1/4	—	(7.4)	—	貼付出、平高台、輪脚底部に溝、南北坡	20-2	R451	15974
7	縁輪陶器 地	口1/3～底1/2	(12.6)	6.4	2.2	貼付出、平高台、輪脚底部に溝、南北坡 高橋編年I期(9世紀前葉)	20-1	R449	15974
8	灰輪陶器 地	底～底1/3	—	(8.2)	—	外：(底)回転式ヘラケズリ 角高台 内：(底)輪脚(自然輪)、直輪器底、直輪器V端部(815～830) 内：(底)輪脚(自然輪)、直輪器底、直輪器V端部(815～830)	20-4	R476	15975
9	灰輪陶器 地	口(一部)～底1/2	(15.0)	(7.2)	2.2	外：(底)回転式ヘラケズリ 角高台 (輪脚板目状压痕) 内：(底)輪脚(自然輪)、直輪器底、直輪器V端部(815～830)	20-3	R475	15975
10	白色土器 地頭器	口1/2完形	7.0	6.5	7.3	口輪脚底取 貼付高台 最大径10.1	19-14	R492	15974



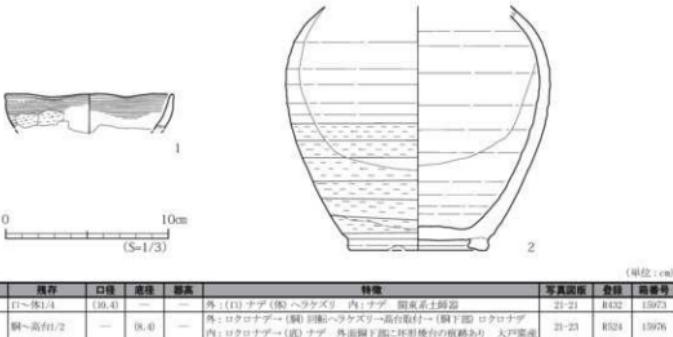
No.	層	種類	現存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録番号	形態年
1	4層	土師器 片	口1/4~底3/4	(14.0)	7.6	5.4	外:クロロゲ 内:同上(底)ガキへ黒色処理 底:切り離し不明→(底~底)回転へケズリ 斜面無良 金型縁多点合符	20-9	R281	15968
2	4層	須恵器 小瓶	底~底部	—	—	—	外:クロロゲ (底)回転へケズリ 斜面無良 大戸窓底	20-10	R533	15976
3	4層	須恵器 瓶	斜~底部	—	(15.0)	—	内:平行タコヒツギア 底:ナデ~~ナナ 大戸窓底	20-12	R536	15976
4	4層	砂輪切削 壺	口~底部	(17.6)	(6.4)	(4.9)	削り出し平台台 高さ2.8cm 高さ縮小1/4(9世紀前葉)	21-1・2	R566・R57	15974
5	4層	灰釉陶器 壺	口~底部	(14.2)	—	—	内:クロロゲ~無地(自然釉) 底無	21-4	R484	15975
6	4層	灰釉陶器 壺	斜~底1/3	—	(12.0)	—	外:(斜~底)回転へケズリ(底)底輪(ハケ巻) 内:底無	21-3	R481	15975
7	4層	石製品 研石 完形	—	—	—	弧形6.7mm厚2.2mm重18.4g 四角 研石研磨 研出	20-14	R313	15969	
8	3a層	土師器 片	口2/3~底3/4	14.4	6.9	4.6	外:クロロゲ 内:同上(底)ガキへ黒色処理 底:切り離し不明→(底~底)回転へケズリ	21-6	R324	15970
9	3a層	土師器 瓶	斜~底1/4	—	(24.6)	—	外内:クロナダ	21-7	R317	15969
10	3a層	土師器 高台杯	底1/4	—	(6.4)	—	外:クロロゲ 内:放射状ミガキへ黒色処理 薄手 削り出し高台	21-8	R332	15970
11	3a層	須恵器 手び	口縁部	(15.4)	—	—	外内:クロナダ	21-9	R341	15970
12	3a層	灰釉陶器 壺	斜~底1/3	—	(6.0)	—	外:端部のみ屈曲する三日月台(底)ナデ(底)横け剥け 尾張・東濃遺 尾野藏原古墳群古中(920~960)	21-13	R480	15975
13	3a層	土製品 瓶口	ほぼ完形	—	—	—	長11.7幅6.3厚2.8重11.8kg 1.9	21-16	R372	15971
14	3a層	土製品 壺	口縁部	—	—	—	外:ナデ 内底に側面付着(盛りの部分)	21-15	R373	15971
15	3a層	石製品 研石 完形	—	—	—	長4.3幅3.1厚2.0重35.77g 研石研磨 研出	21-14	R376	15971	
16	1層	須恵器 壺	ほぼ完形	11.0	4.2	3.6	内:クロナダ 底:剥離切跡無調整	21-17	R383	15971
17	1層	須恵器 上縁	底1/1	—	4.5	—	外:クロロゲ~高台貼付~高台の設置部の内側へケズリ 内:クロロゲ	21-18	R386	15971

図版16 第II層 (SX3382沢跡1~4層) 出土遺物3

土製品は須恵器蓋のつまみ部を利用したものである。

【第I層】(図版17、第3表)

土器、施釉陶器、瓦、土製品、石製品、鉄製品が出土している。土器は土師器と須恵器で、土師器は壺・双耳壺・蓋・托(図版21-22)・羽釜形土器・甕、須恵器は壺・稜塊・蓋・大平鉢・小瓶・長頸瓶・甕・瓶がある。特徴的なものに、関東系土師器壺(図版17-1)、大戸窯産の長頸瓶(2)・小瓶・大平鉢(図版21-24)がある。施釉陶器は緑釉陶器壺と灰釉陶器壺で、この他に平瓦II A類、土師質と須恵質の風字硯、土師器甕胴部を利用した円盤状土製品、砥石、鉄釘、墨書きされた硯(図版21-25)がある。



図版17 第I層出土遺物

土器・陶器部

	青銅 供給具	縫隙陶器 供給具	火候陶器 供給具	白色土器 の供給具	土器部		陶器部			直系系土器 供給具		調査土器		計	
					の供給具	の供給具	の供給具	の供給具	の供給具	の供給具	の供給具	の供給具	の供給具		
SK3382 大室II層	第1層	1	3	13	2	10	28	1							58
	1層		1	152	3	26	41	393					37		419
	2層			39	6	4	18						14		82
	3a層	6	2	580	14	212	235	173					1		1324
	3e層			6	6	5	3								9
	3f層			2	2										5
	3i層			13	6	3	11						1		34
	4a層			23	1	21	1	14							69
	4d層	1	2	4	2	1	1								19
	4e層	11	9	471	1	192	137	91					4		999
	5a層			22		27	21	16					1		91
	5b層	8		1	999	5	695	537	193			2			2469
	5c層			1		3	1								6
	小計	26	14	1	233	24	1361	3008	617		4	59	1		5426
C期	柱穴			11		11	5	5							32
	SK3379夢地層	1		9		8	1	2							21
	小計	1		29		19	6	7							53
SK3382 大室II層	6e層			193		163	148	51							555
	8a層			148		85	55	51							339
	8b層			1											3
	9a層			117	1	53	20	42				1			234
	小計			467	1	304	226	149					1		1148
B期	SD3376夢			198		96	9	20							243
	SK3377土壤			173		64	17	37							241
	SK3377+3378+SD3326			39		29	2	8							49
SK3382 大室III層	小計			271		180	29	65							544
	10a層			59		39	7	12							109
	10b層			1		1									3
	小計			52		49	7	12							111
A期	P1 技取穴			7	2	5	1	4							19
	SD3372圓			3		3		1							7
	SK3374土壤			9		9									19
SK3382 大室IV層	SK3371夢地層			2				1							3
	小計			21	3	16	1	7							48
	12層			5		7							1		13
	小計			5		7							1		13
P1	1	27	17	1	3962	28	1929	1296	885	1	4	59	3		3903
	計2	1	27	17	1	5119			2176			59	3		7403

※供給具：环、底台环、环片、双耳环、端、残块、竹竹林、茎、盖、柄、托。

貯蔵具：土器容器、竹、箱也器類、竹筒、底面直・底面曲・小瓶、便。

煮炊具：土師容器、羽釜、瓶、須志泥瓶。

土器・陶器部以外

	瓦				堆	壁	土製品	石製品	石器	細工	金属製品	鉄片	伊豆 加賀	木製品	骨角器	文字 資料	動物 遺存体	植物 遺存体	計	
	軒丸	軒平	丸	平																
SK3382 大室I層	第1層		1		2	1	2	1	2	3					2				11	
	1層		21	18		2	1	2	3	3	2								52	
	2層		3	5			1		1										10	
	3a層		29	33	1	5	4	1	9	4	23			4	2				115	
	3e層		1	1															1	
	3f層		1	1															2	
	4a層		3	2															4	
	4d層		21	42		2	2	1	11	2	4	1		2					88	
	4e層		3	2															7	
	5b層	2	1	56	55	1	6	5	2	30	3	11		2					174	
	小計	2	2	139	160	1	2	15	13	6	54	15	49	1	2	1	2		462	
SK3382 大室II層	6e層		12	15			1	1	5	2									37	
	7層	1	7	6		1	1	1	1	3	1	1							25	
	8a層		1	2															1	
	8b層	1	3	6		1	1	1	1	4		1	1						20	
	9a層		2	1			1												6	
	小計	2	24	21		3	2	3	2	6	9	1	2	1	1	2			89	
B期	SD3376圓		4	8		2		2	1					1	4				22	
	SK3377土壤	1	6	8		3	1		1				1		1				22	
	SK3377+3378+SD3376		2	3		1									3				9	
SK3382 大室III層	小計	1	12	19		6	1	2	2			1	1	1	8				53	
	10a層		1	4					2	1									9	
	小計	1	4						2	1									9	
A期	P1 技取穴		1	4					1					1	2	1	5		5	
	SK3374土壤		1																1	
	SK3371夢地層		1																1	
	小計	1	1																7	
SK3382 大室IV層	計	2	5	136	256	1	5	25	17	14	61	23	49	2	3	1	35	14	1	630

※文字資料は墨書き土器と墨書きされた縁、刻書き土器で、これらは上器、石製品と文字資料の両方で観察している。

第3表 92次調査出土遺物の破片集計



図版18 A期遺構・第II層 (SX3382大別3層) 出土遺物写真



図版19 第II層(SX3382大別1・2層)出土遺物写真



1 ~ 8 : SX3382-5b 層、9 ~ 14 : 4 層

(13 : S=1/5、それ以外は S=1/3)

図版20 第II層 (SX3382大別1層) 出土遺物写真



1～5 : SX3382-4層、6～16 : 3a層、17～20 : 1層、21～25 : 第I層

(19 : S=1/6, それ以外はS=1/3)

図版21 第II層 (SX3382大別1層)・第I層出土遺物写真

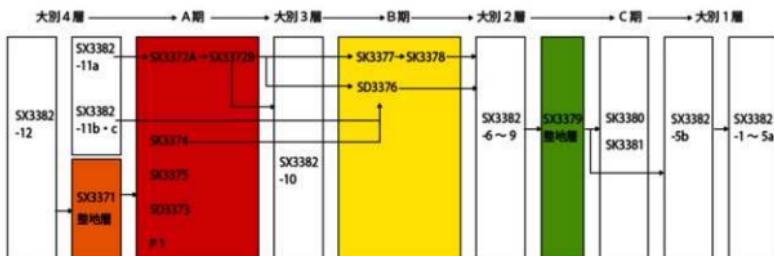
3. 総括

(1) 遺構の年代

遺構の重複関係と遺物の特徴から年代を検討する。

1) 重複関係

A期遺構には、整地層・土壌・溝・柱穴、B期遺構には、溝・土壌・柱穴、C期遺構には整地層・土壌・柱穴がある。これらのうち主な遺構の重複関係を図版22に示した。以下、各期の年代について検討を加える。



図版22 第92次調査遺構変遷図

2) 年代

各期で検出した遺構の年代は、出土遺物が少量であるため特定するのが難しい。そこで、各期の地盤や覆土となり、出土遺物のほとんどが出土したSX382沢跡堆積層の年代をあわせて検討することで、各期の遺構の年代を推定することとする。ただし、SX382の遺物について、大別1・2層出土の土師器の多くが接合しない摩耗した破片が散在する出土状況であったように、遺物の出土状況は一括して廃棄された状況を示しておらず、ほとんどが本調査区東側の第84次調査区や北側の丘陵平坦部側から土砂などとともに流入してきたものと考えられる。したがって、遺構とSX382の年代は、下限を示すとみられる土器を年代推定資料として取り上げ、検討を加える。具体的な方法は、ある程度器形や調整が判明する土器を、多賀城跡出土土器編年（『本文編』：以下、多賀城編年と記述する）に位置づけ、次に可能であれば、多賀城城内や城下の山王遺跡出土土器、広域流通品である陶磁器類などを比較し、年代を推定することとする。

①A期遺構とSX382沢跡大別4層（11・12層）

土師器は全て非ロクロ整形である。A期のSK3374土壌から出土した完形の壺（図版11-1）は、体部の内外面に段が付き、底部が平底気味の丸底である。このような特徴は、多賀城編年のA群土器に比定され、類似するものには第45次調査SI1432竪穴住居跡出土土器（『年報1984』）があり、年代は8世紀前葉～中頃に位置づけられている。したがって、SK3374は8世紀前半頃と考えられ、後述するA期遺構を覆うSX382大別3層の年代から、A期遺構は8世紀前半頃と推定される。

SX3382-12層から出土した土器は僅かだが、の中には体部に段が付き底部が丸底の土師器坏が出土していることから、A期遺構と同様に8世紀前半頃と推定される。

②SX3382沢跡大別3層（10ab層）

土師器はロクロ整形の坏が1点出土した以外は、全て非ロクロ整形である。10a層から出土したロクロ整形の土師器坏（図版14-3）は、口径に対して底径が大きく器高が小さい器形で、底部の切り離し後に体部中位から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施される。共伴する非ロクロ整形の土師器坏には、寸法や器形がほぼ同じで外面体部に段がなく底部が平底気味の丸底のものがある（図版14-2）。須恵器坏には、底部全面に手持ちヘラケズリ、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施されたものがある。このような特徴と類似するものには山王遺跡SD2124溝出土土器（宮城県教育委員会1994）がある。これらの年代は8世紀中頃～後半に位置づけられており（田村2007）、SX3382大別3層は出土量が少ないことから大きく捉えて8世紀後半頃と考えられる。

③B期遺構

土師器は非ロクロ整形が主体だが、大別2層下の遺構検出時に出土したものの中に、ロクロ整形で底部全面に回転ヘラケズリが施されたものが1点認められる。また、須恵器は出土量が少ないが、坏の底部切り離し後に調整が施されている。これらの特徴は多賀城編年のB・C群土器に比定され、B群土器が8世紀末、C群土器が9世紀前半に位置づけられている。年代推定の根拠とした土器が小破片であり、多賀城内や周辺の遺跡の出土資料との比較が困難であることから、大きく捉えて8世紀末～9世紀前半頃とみておきたい。

④SX3382沢跡大別2層（6～9層）

8・9層出土土器は、小破片のものが多く年代推定が困難であるため、6c・7層出土土器について検討を行う。

大別2層出土土器の特徴として、土師器は非ロクロ整形が主体だが、ロクロ整形のものも少量出土していること、須恵系土器が認められないことがある。

7層から出土したロクロ整形の土師器坏（図版14-5）は、口縁部から体部までの残存だが、薄手で器高が大きい器形とみられる。須恵器坏には、底部切り離し後に調整が施されるものと回転ヘラ切りのものがある。6c層から出土したロクロ整形の土師器坏には、底部全面に調整が施されたものがあり、須恵器坏には、底部の切り離しが回転糸切りのもの（図版14-6）がある。これらの特徴は多賀城編年のC・D群土器に比定され、類似するものには第60次調査SE2101井戸跡III層出土土器（『年報1991』）や、1994年度の現状変更に伴う調査で検出されたSK2272土壤出土土器（『年報1994』）がある。SE2101-III層出土土器の年代は、共伴した漆紙文書から天長9年（832）以降の9世紀前半で、SK2272出土土器はそれよりも新しい9世紀第3四半期頃に位置づけられている。したがって、6c・7層の年代は9世紀前半～後半頃と推定される。

⑤C期の遺構

SX3379整地層を掘りこむ柱穴の掘方埋土からロクロ整形の土師器坏が出土している。ロクロ整形の土師器坏は、多賀城編年のB群土器以降で認められる。また、多賀城内と城下では8世紀末～9世

紀初頭に普及が拡大し主体となることが指摘されている（吾妻2004、村田2007）。したがって、柱穴は8世紀末以降と考えられ、C期遺構よりも古いSX3382大別2層と新しい大別1層の年代を考慮すると、C期遺構は9世紀後半～10世紀中葉頃と推定される。

⑥ SX3382沢跡大別1層（1～5層）

土師器はロクロ整形の割合が高く、坏では底部の切り離しが回転糸切りのものが主体となること、須恵器坏は、底部の切り離しが回転ヘラ切りや回転糸切りのものが主体となる。また、須恵系土器や政庁第IV期の平瓦II C類が認められる。

5層では、僅かではあるが須恵系土器坏・台付鉢が出土しており、このうち坏は器高が3.5cmと小型である。このような特徴はF群土器に比定され、類例には第61次調査第7層出土土器（『年報1991』）があり、年代は10世紀中葉に位置づけられる（『年報2006』）。したがって、5層の年代は10世紀中葉頃と推定される。

3a層では、三日月高台の灰釉陶器塊（図版16-12）が出土している。この塊は、尾張または東濃産で猿投窯系施釉陶器編年（尾野2003・2008）のVII期古～中（920～980年頃）と考えられる。したがって、5層の年代を考慮すると、3a層は10世紀中葉以降と推定される。

1層では、須恵系土器坏（図版16-16）と高台塊ないし皿（17）が出土している。この内、高台塊ないし皿は底部破片で、高台を貼り付けた後に接地面の内側に浅くヘラケズリが施され、幅が広く肥厚した高台部が作り出される。このような特徴はF・G群土器に比定され、類例には、F群の第66次調査SE2314井戸跡出土土器（『年報1995』）や、G群の第62次調査SK2169土壙出土土器（『年報1992』）があり、年代は前者が10世紀末～11世紀前葉、後者が11世紀中葉に位置づけられている（『年報2006』）。したがって1層の年代は10世紀末～11世紀中葉頃と推定される。

（2）遺物について

1) 出土傾向

土器（土師器、須恵器、須恵系土器、製塙土器）、白色土器、陶磁器（青磁、綠釉陶器、灰釉陶器、瓦、埴、硯（円面硯、風字硯）、土製品（円筒形土製品、支脚、羽口、埴堀、土鍤、円盤状土製品）、石製品（砥石、金床石、碁石）、石器、転用砥、金属製品（鉄製品、銅製品）、鉄滓、炉底・炉壁、木製品、骨角器、文字資料（墨書き土器・硯、刻書き土器）、動植物遺存体が出土した（第3表）。遺物の時期は、古代が主体で、ごくわずかに古代以前のものがある。中世の遺物は認められない。

量、遺物の種類とともに第II層であるSX3382沢跡からの出土が多く、その中でも大別1層の3a・4・5b層が主体を占める。層位的な出土状況としては、時期が新しくなるにつれて出土量と遺物の種類が増加しSX3382大別3層とB期遺構との間を境に、その上下で量・種類ともに大きく異なる。

個別の遺物については、A～C期遺構の間で調査面積が異なることから単純な比較はできないが、大まかな傾向を記述すると、土器・陶磁器はA期遺構とSX3382大別3層、土師器はB期遺構が多く、須恵器はより新しい時期になるにつれて出土が増える。施釉陶器や須恵系土器はSX3382大別1層から出土が確認されるようになる。瓦や土製品の羽口・埴堀、石製品の金床石、鉄滓等の金属生産関

係を示す遺物は、SX3382大別1層からの出土が多い。一方、文書作成等に使われたとみられる硯は、円面硯がA期遺構とSX3382大別1層から1点ずつ、風字硯がSX3382大別1層から1点、第1層から2点のみで、非常に少ない。

2) 特徴的な遺物

次に、上記の遺物のうち、五万崎地区東部の土地利用の方法を検討する上で、特に重要と考えられる外来系土器や生産関係の遺物等を取り上げて検討を加える。具体的には遺物の特徴や年代、数量と出土状況、数量と年代等の関係について検討する。なお、数量は特に断りのない限り破片数を用いる(註1)。

① 外来系土器

A. 施釉陶器と貿易陶磁

施釉陶磁器は緑釉陶器27点、灰釉陶器17点、貿易陶磁1点出土した(註2)。本調査区は200m²であるため、100m²あたりに換算すると施釉陶磁器で22.5点となる。内訳は緑釉陶器13.5点、灰釉陶器8.5点、貿易陶磁は0.5点である。第4表は本調査区と城前官衙・政庁の出土量を100m²あたりで比較したものである。施釉陶磁器の出土量を比較すると、本調査区は城前官衙の7.6倍、政庁の62.5倍と両地区よりも非常に多い。また、緑釉陶器と灰釉陶器の量比をみると、本調査区は1.6:1(13.5:8.5)、城前官衙は1:3.1(0.71:2.19)、政庁は1:3(0.06:0.18)で、灰釉陶器より緑釉陶器の占める割合が高い。

緑釉陶器はすべて食器類で塊24点、皿3点である。第1層から塊1点出土した以外は、すべてSX3382からの出土で、5b層8点(塊7点、皿1点)、4層11点(塊10点、皿1点)、31層塊1点、3a層6点(塊5点、皿1点)である。すべて10世紀中葉頃かそれ以降の大別1層(第3a～5b層)から出土した。塊(図版16-4・5)・皿(15-7)は軟陶で内外面に薄い淡緑色の釉が施される。焼き上がりの胎土の色調は淡い白色を呈す。底部は削り出しの平高台である。形状は口径に比べて器高が低い。図版16-4は体部から口縁部にかけて直線状に立ち上がる器形である。皿(15-7)は体部から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁端部はさらに外反する器形である。これらの特徴は洛北窯産にみられるもので、平安京近郊窯の緑釉陶器編年(高橋2003)のI期(9世紀前葉頃)に製作されたと考えられる。なお、上記と施釉・胎土の特徴が酷似する破片が19点あるほか、硬陶で内外面に灰オリーブ色の釉が施された破片が1点ある。ともに洛北窯産で同時期に製作された可能性が高い。

図版15-5は輪花塊の優品として特筆される。硬陶で内外面に厚い淡緑色の釉が施される。焼き上

	施釉 陶磁器	緑釉 陶器	灰釉 陶器	貿易 陶磁	面積(m ²)	出土点数	出典
第92次調査	22.5	13.5	8.5	0.5	200	施釉陶磁器45点 (緑釉陶器27点、灰釉陶器17点、貿易陶磁1点)	本書
城前官衙	2.96	0.71	2.19	0.03	5.629	施釉陶磁器167点 (緑釉陶器240点、灰釉陶器123点、貿易陶磁4点)	『南面I』
政庁	0.36	0.06	0.18	0.12	11.624	施釉陶磁器42点 (緑釉陶器7点、灰釉陶器21点、貿易陶磁14点)	『補遺編』

※小数第4位は四捨五入した。

※第92次調査は調査区面積である。城前官衙は、ほぼ全面を調査したので施設群の敷地面積とした。政庁は同じ場所を複数回調査した例があるので、便宜的に築地内側の面積とした。

第4表 多賀城内の施釉陶磁器出土点数

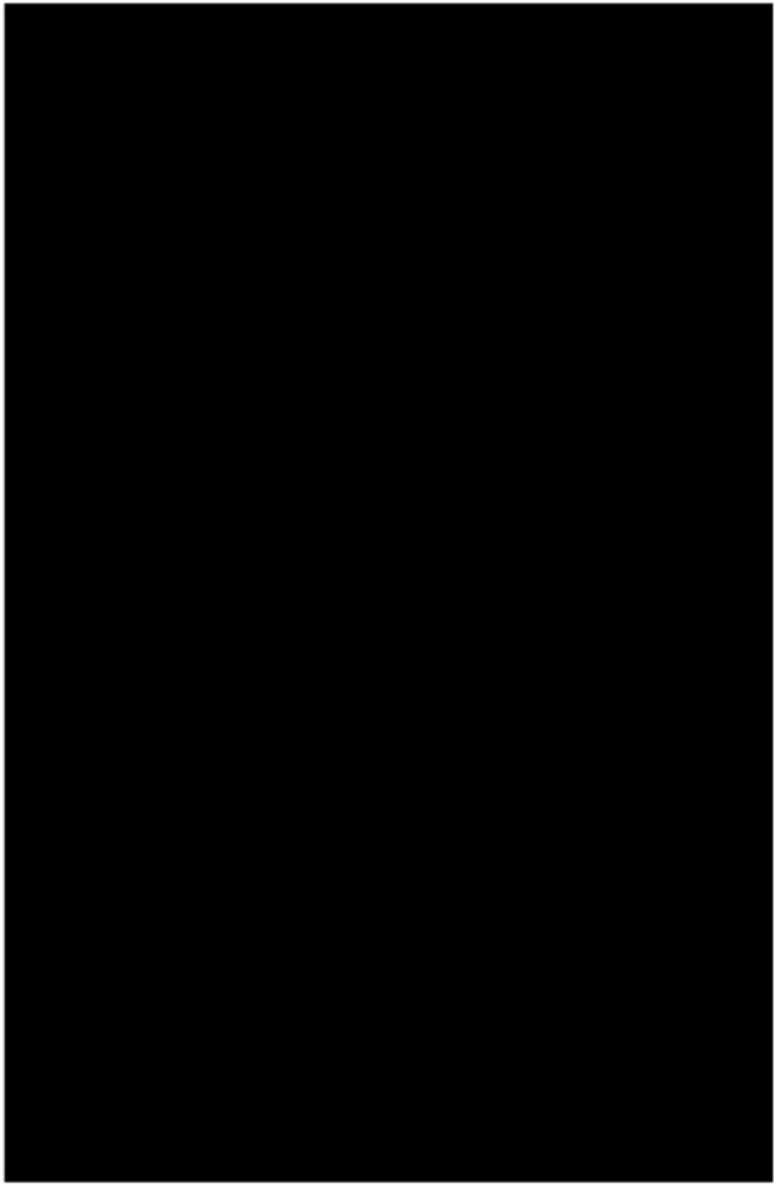
がりの胎土の色調は青灰色を呈す。高台は貼付輪高台で、断面形状はいわゆる角高台である。高台端部の接地面は体部外側である。器形は体部の張りが強く、口縁端部が水平方向に長く引き出される。輪花は口縁端部四方のV字形の切り込みで4輪花を表現する。この外面切り込みの延長上に縱方向の線が押圧され、内面にそれと対応する稜線が作り出される。内面には底部中央に上からみた宝相華文が陰刻され、体部4箇所にみられる稜線の間に横からみた宝相華文が配される。底部内外面には目跡が各3箇所確認できる。三叉トチンを使って重ね焼きされたとみられる。以上の特徴は猿投窯産にみられるもので、猿投窯系施釉陶器編年（尾野2003・2008）のV期新（9世紀前葉頃）に製作されたと考えられる。

多賀城内では、この時期の猿投窯産の綠釉陶器の陰刻花文が施された輪花塊は非常に珍しい。類例には、平安京左京二条二坊冷然院の北内溝出土品（京都市埋蔵文化財研究所1984・古代文化調査会2012・関西文化財調査会2014）や、平安京右京三条三坊五町出土品（京都市埋蔵文化財研究所1990）が知られる。前者は嵯峨天皇の離宮後に嵯峨太上天皇の御所となった場所で（註3）、後者は嵯峨天皇の離宮の後に源融（嵯峨天皇の第12皇子）の邸宅になると推定があり（尾野2013）、図版15-5は、嵯峨天皇との密接な関係を示す物品であることを想定しうる。さらに、『延喜式』の「年料雜器條」に記載される尾張国から中央へと貢納される品目・数量・規格と、平安京およびその周辺の出土品との対応関係は図版23であったとする指摘がある（平尾2016）（註4）。図版15-5の口径は21.2cmで、図版23の「中椀」にあたる。「大椀」「中椀」の出土例は平安宮・京でも極めて少數であるとの指摘から（註5）、本資料は、猿投窯産の綠釉陶器の中でも希少品であったことがうかがえる。よって本資料は、嵯峨天皇との密接な関係を示す物品という格式の高さ、平安宮・京でも出土例が極めて少ないという希少性の高さを勘案すると、陸奥国司に供された高級食器であったと考えられる。多賀城内から出土したことは、中央官司から陸奥国司への備品の一つとして支給されたことを示す可能性が高い。一方、上記で述べた嵯峨天皇との密接な関係を示す物品であることを重視し、9世紀前半の尾張産綠釉陶器は嵯峨天皇の用に供するべく家政機関たる院司によって調達（生産）されていたという説（尾野2013）によるならば、本資料は嵯峨天皇と密接な関係を持つ陸奥国司が嵯峨天皇から下賜された高級食器とみることもできる。本資料の多賀城にもたらされた要因については、陸奥国内の同時期の綠釉陶器、とりわけ輪花塊の出土例を総合的に検討することで明らかにする必要があろう。

図版21-12は段皿の段部である。硬陶で内外面に厚い淡緑色の釉が施される。焼き上がりの胎土の色調は青灰色を呈す。猿投窯系施釉陶器編年（尾野2003・2008）のVI期中（9世紀後葉頃）頃と推定される。なお、硬陶で内外面に濃緑色の釉が施された破片（図版21-11）が1点あり、猿投窯産の可能性があるが詳細は不明である。

灰釉陶器は塊14点、皿・長頸瓶・瓶が各1点である。第I層から塊3点出土した以外は、すべてSX3382からの出土で、5b層6点（塊5点、皿1点）、4・5b層1点（長頸瓶）、3層4点（塊）、31層1点（塊）、3a層2点（塊）、1層1点（瓶）である。すべて10世紀中葉～11世紀前半頃の大別1層（第1・3～5b層）から出土した。

塊（図版15-8）・皿（図版15-9）は、須恵器質で焼き上がりの胎土の色調は暗褐色である。内面

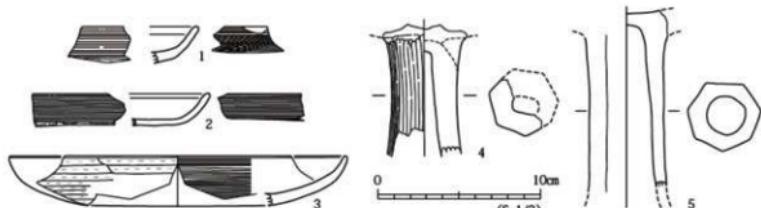


に自然釉とみられる灰オリーブ色・灰黄色の釉がみられる。高台は貼付輪高台である。高台の断面形状はいわゆる角高台で端面がくぼむ。高台端部の接地面は体部外面側である。皿(図版15-9)の高台端部には板目状压痕がある。体部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形である。これらの特徴は猿投窯産にみられるもので、猿投窯系施釉陶器編年(尾野2008)のV期新(9世紀前葉頃)に製作されたと考えられる。塊(図版16-12)は、硬質の陶器で内外面の体下部に灰オリーブ色・灰黄色の釉が漬け掛けされる。高台は貼付輪高台で、断面形状はいわゆる三日月高台で端部が屈曲する。高台端部の接地面は底部外面側である。これらの特徴は尾張・東濃産にみられるもので、猿投窯系施釉陶器編年(尾野2008)のVI期古～中(10世紀前半～後半)に製作されたと考えられる。なお、上記と施釉・胎土の特徴が類似する破片が14点あり、猿投窯産や尾張・東濃産の可能性があるが詳細は不明である。

貿易陶磁は青磁碗(図版12-4)がある。厚い灰オリーブ色の釉が施される。高台は貼付輪高台である。このような特徴は、越州窯系青磁の大宰府分類(太宰府市2000)I-2類にあたり、多賀城跡では初の出土例である。大宰府磁器区分のA期新(9世紀後半～10世紀中頃)のものと考えられる。

B. 罫内系土師器

第83次試掘調査のSX3382沢跡堆積層から高杯の脚部が1点出土している(図版24-4)。脚部の外



No.	次数	遺構・層	断面	特徴	登録番号	文献	施設名
1	89	SK3264	坪	外：口縁ヨコナデ 体下部手持ちハケズリ 内：ヨコナデ-放射状暗文	R6	『岐力南面地区』	岐力526
2	45	1層(表土)	風	外：口縁-体部ヨコナデ 底部オキエ 内：ヨコナデ	R2	未報告	岐力521
3	62	SI2160A	塵土	外：口縁-底部手持ちハケズリ 内：ヨコナデ	R7	『年報1992』	岐力592
4	83	SX3382	高杯	脚部心棒手造 面取り(7面) 外：タテミガキ	未登録	未報告	未登録
5	6	表土	高杯	脚部心棒手造 面取り7面	E1	『岐力町』回鋸編	岐力507



1: 89次 SK3264、2: 45次 1層(表土)、3: 62次 SI2160A、4: 83次試掘区、5: 6次表土

(全てS=1/3)

図版24 多賀城跡出土の罫内系土師器

面断面形は七角形とみられる。外面は面取後、タテ方向のヘラミガキが施される。これらの特徴は畿内で出土する平城宮分類の高杯Aと類似する（註6）。内面が平滑で輪積痕がみられないので、芯棒に粘土紐を巻き上げて製作された「山城型」（小笠原2016）の可能性が高い。外面断面形が七角形である特徴から、製作時期は平城宮土器III～平安京土器I期（新）段階頃（8世紀後半～9世紀中葉頃）と考えられる。

このような土師器とりわけ食器類は、在地の土師器の食器類が内面にヘラミガキ・黒色処理を施すことから、それとは明確に区別できる。ここでは前者のうち、畿内で出土する土師器と類似する形状、寸法、製作技法（暗文や口縁部のヨコナデ、底部外面から体上部外面のヘラケズリ、体部外面のヘラミガキ）、精製された胎土、赤褐色・灰白色系の色調に焼成された土師器を「畿内系土師器」として述べる（註7）。

多賀城内の出土例をみると、城前地区（『城前I』）、坂下地区（図版24-2）、五万崎地区（図版24-4）、大畠地区（『年報1992』）、政庁地区（『図録編』）で各1点の出土例がある。器種は全て食器で、坏（図版24-1）、皿（図版24-2・3）、高坏（図版24-4・5）がある。坏（図版24-1）は城前官衙第Ⅱ期（政庁第Ⅱ期）造営段階に伴うSK3264出土品である（『城前I』）。平城宮分類の杯Cと類似する。形状と一段斜放射状暗文の特徴から、製作時期は平城宮土器I～III段階頃（8世紀前半頃）とみられる。坏（図版24-2）は表土出土である。平城宮分類の皿と類似する。形状と製作技法の特徴から、製作時期は平城宮土器IV段階以降（8世紀後半以降）とみられる。皿（図版24-3）は大畠地区の9世紀前葉頃のSI2160A竪穴住居跡出土である（『年報1992』）。平城宮分類の皿Aと類似する。口径が21.5cmであること、底部から口縁部上端までヘラケズリが施される特徴から、製作時期は平安京土器I期（中）段階頃（8世紀末～9世紀初頭頃）とみられる。高坏（図版24-5）は政庁地区の表土出土である。平城宮分類の高杯Aと類似する。図版24-4と同様に、製作時期は平城宮土器III～平安京土器I期（新）段階頃（8世紀後半～9世紀中葉頃）とみられる。

多賀城内から出土する畿内系土師器の特徴をまとめると、食器の坏・皿と高坏であり、1調査区あたりの出土点数は1点と非常に少ないと、8世紀前半から9世紀中葉頃のものであることが挙げられる（註8）。

C. 白色土器

多賀城跡では初の出土例である。10世紀中葉のSX3382-5b層から短頭壺が1点出土した（図版15-10）。淡いピンク色を帯びる白色の精良な胎土を用いる（註9）。低下度焼成されており、本調査で出土した洛北窯産綠釉陶器と同様の焼き上がりである。施釉はない。白色土器の畿外からの出土例は確認されていない（註10）。平安京においても、平安時代を通じて出土土器全体に占める比率が低いこと、器種は椀・皿類、次いで高坏、三足盤の順に多く、そのほかは非常に少ないとされる（平尾1994）。また短頭壺の優品は平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡出土品（京都市埋蔵文化財研究所2005）のみと非常に珍しいので、図版15-10は受注生産品であったとの指摘もある（註11）。また、製作年代は胎土と焼き上がりの色調が9世紀前葉頃の洛北窯産の綠釉陶器と共通すること、同時期の須恵器短頭壺の器形と類似することから、9世紀前葉頃の可能性が高いとのことである（註12）。白色土器の

畿外出土例は確認されていないこと、平安宮・京でも出土例が極めて少ないと、その中でも短頸壺は稀少な器種であることから、本資料は特殊な器物とみなせる。その用途については、白色土器を文献史料に記載される「栗栖野様器」や「栗栖野上高杯」を指すとし（高橋1997a）、宮中とりわけ内裏やその周辺から集中して出土する傾向がみられることから、内裏などで行なわれた大臣大饗などの儀礼で使われたことが想定されている（高橋1997b）。その説によるならば、おそらく本資料についても、陸奥国司が主催する特殊な儀礼で使われた物品であったとみられる。

D. 大戸窯産須恵器

大戸窯産の須恵器は長頸瓶36点、広口瓶1点、小瓶2点、大平鉢1点、甕10点の計50点出土した。いずれもSX3382からの出土で、内訳は6c層1点（甕）、5b層3点（長頸瓶2点、甕1点）、4層8点（長頸瓶7点、甕1点）、3a～3l層19点（長頸瓶17点、甕2点）、2層2点（小瓶1点、甕1点）、1層4点（長頸瓶1点、広口瓶1点、甕2点）、第1層13点（長頸瓶9点、小瓶1点、大平鉢1点、甕2点）である。大別1層からの出土が多くを占める。長頸瓶（図版17-2）は、胴部が梢円形、高台の接地面が外側で、断面が外側から内側へ斜めに上がる形状であり、胴下部には环形焼台の痕跡が認められる。図版20-11は、底部のみではあるが高台部の断面が四角形であり、ともに9世紀前半の上雨屋12号窯式と考えられる（会津若松市教育委員会1994）。広口瓶（図版21-20）や大平鉢（図版21-24）は、9世紀後半頃の上雨屋107号窯式以降のものと推定される。

②生産に関係する遺物

鉄・銅生産、漆作業、骨角器製作に関係する遺物がある。SX3382大別1・2層からの出土が多いが、骨角器製作に関する遺物はA・B期遺構から出土している。

鉄生産に関わる遺物は、金床石1点（図版20-8）、鉄滓49点（うち椀形滓8点）（図版19-2）、炉底と炉壁1点ずつがある。いずれもSX3382からの出土であり、出土層は金床石が5b層、椀形滓が8b層2点、4層1点、3a層5点、鉄滓が8b層2点、7層3点、6c層2点、5b層11点、4層3点、3a層18点、1層2点、炉底が4層、炉壁が7層である。

銅生産に関わる遺物は、坩堝（図版16-14）がSX3382-3a層から1点、羽口（図版16-13）が5b層3点、4層1点、3a層3点、1層1点出土した。坩堝は内面、羽口は端部の内外面に銅滓の付着が認められた。なお、5a層から銅製品の小破片が1点出土している。

漆が付着した土器（図版18-8・12）は25点あり、内訳は、B期遺構のSD3376溝1点、SK3377土壌1点、SX3382-8b層2点、7層2点、6c層4点、5a・b層8点、4層2点、3a層2点、第1層3点である。種類と器種との関係では、土師器坏が10点と最も多く、須恵器坏・甕が5点ずつと続く。

骨角器製作に関わる遺物は、SD3376から出土した切断痕跡のある鹿角1点である（図版18-9）。

③その他

A. 特徴的な土器

壺G（図版14-10）、ミガキ須恵器（8・9）、湖西産の須恵器長頸瓶（図版20-6）、土師器の羽釜形土器（古川2014）（図版15-2）と底部が張り出す無底の筐（図版16-9）、土師器坏で内面に回転ミガキが施されたもの（8）や、回転ミガキが施された可能性があり胎土に金雲母を多量に含むもの（1）、

削り出し高台の土師器高台坏(10)、土师器托(図版21-22)と須恵器托(図版16-11)がある。壺Gとミガキ須恵器、羽釜形土器以外は1点ずつの出土である。

壺Gは3点あり、SX3382-6c層から口頭部と頸部が1点ずつ、4層から頸部が1点出土した。6c層の2点は断面が赤褐色である。

ミガキ須恵器は8点あり、SX3382-6c層から6点、5b層から2点出土した。器種は坏2点、双耳坏3点、蓋3点である。多賀城内でミガキ須恵器が5点以上出土したのは五万崎地区、城前地区、大畠地区のみで、このうち五万崎地区西部は43点と最も多く認められる(宮城県教育委員会2018)。五万崎地区東部に位置する第92次調査区での出土により、多賀城内では五万崎地区全体でミガキ須恵器の出土量が多いことが確認できる。

羽釜形土器はSX3382-5b層と第I層から1点ずつ、底部が張り出す無底の壺は3a層から出土した。羽釜形土器については、東北地方では国府・城櫓周辺での確認事例が多く、出土量と出土例が限定的であることから儀式用の土器で、底部が張り出す無底の壺はこれに伴うものと指摘されている(古川2014)。羽釜形土器は多賀城内では大畠地区や鴻ノ池地区での出土に続き3例目、底部が張り出す無底の壺は大畠地区で確認された3例に続き4例目であり、五万崎地区では初の出土例である。

B. 文字資料

墨書き土器は4点あり、A期遺構P1の抜取穴(土師器坏体～底部)(図版8-3)、SX3382-10a層(須恵器高坏脚部)(図版14-4)、6c層(須恵器坏底部)(7)、5b層(須恵器坏体部)(図版15-1)から1点ずつ、墨書のある礪が第I層から1点(図版21-25)出土した(註13)。

刻書き土器は11点あり、B期遺構SD3376(土師器坏体部)、SX3382-5b層(土師器坏底部)、5a層(須恵器坏底部)、3e層(須恵器坏底部)から1点ずつ、4層から2点(土師器・須恵系土器坏底部)、3a層から4点(土師器・須恵器坏底部)、第I層から1点(土師器坏底部)出土した。SD3376では、非クロコ整形で内外面に黒色処理された土師器坏の焼成後の体部外面に、「大」あるいは「才」と書かれている(図版18-7)。それ以外は全て焼成前にヘラ書きされており、記載内容が推定できるものは、土師器・須恵器坏の底部外面に、「×」(SX3382-3a・5a・5b層、第I層)、須恵器坏底部に「＊」(SX3382-3a層)(図版21-10)である。

C. 多賀城創建以前の土器

古墳時代前期あるいは中期の土師器甕、中期の土師器坏、後期の土師器甕、須恵器甕、関東系土師器坏(図版17-1)が出土した。古墳時代の遺物は、隣接する山王・市川橋遺跡と同時期のものと考えられる。関東系土師器坏は、小型の半球形で口縁端部が外反する器形であり、北武藏型坏(鈴木1983・1984)とみられ、年代は7世紀後半と考えられる。

(3) 五万崎地区東部の土地利用の変遷

本調査では、8世紀前半～11世紀中葉頃の遺構・遺物を確認した。これらを東側隣接の第84次調査や周辺の過去の調査成果とあわせて検討することで、主に五万崎地区東部の土地利用の変遷をまとめたい(図版1・2・5)。

1) A期

8世紀前半頃で政府第I期に当たる。遺構は8世紀後半頃の沢の堆積土(SX3382大別3層)に覆われる。地形は、北東の丘陵から南西の沢に向かう斜面で、北東隅の丘陵と南西部の沢との高低差は2mある。

政府第I期南辺については、調査区内から築地塀や材木塀などの区画施設、区画施設の造営や補修にかかる整地や土取り穴、築地の痕跡を示す崩壊土等を確認できなかった。第84次調査でも南辺は確認できなかったが、調査区北端では、南辺造営時とみられる土取り穴の可能性がある土壌群を検出している。これらを勘案すると、南辺は今回の調査区よりも南側ではなく、北側に位置する可能性が高い。その場合、南辺は、第90次調査から西側の丘陵部分において方向がやや北に振れることになる。第90次調査区の東側と西側で、南辺の角度が異なっていたことを今後検討する必要があろう。

南辺南側の土地利用については、まず沢の斜面を切土・盛土し平坦面が造られる(SX3371整地層)。次にその平坦面で沢を横断する東西方向に溝(SD3372)、その南側に土壌(SK3374)等が造られる。溝が埋まると大きな掘方の掘立柱の構造物(P1)が造られる。また、本調査区東側については、第84次調査区では、土取り穴群以外は確認できないが、さらに約50m東の第45次調査区では、政府第I期の堅穴住居を検出している。五万崎地区東部から坂下地区西部にかけての政府第I期南辺の南側隣接地は、空閑地や土取り穴ばかりではなく、何らかの土地利用がされていた可能性があろう。

2) B期

8世紀末～9世紀前半頃で、政府第III期に当たる。遺構は9世紀前半～後半頃の沢の堆積土(SX3382大別2層)に覆われる。A期からの沢の埋積が進むが、地形の起伏はA期と大きく変化しない。

土地利用については、A期遺構を覆う沢の堆積土(SX3382大別3層)が地盤となる。堆積土は水分を多く含む黒褐色砂質シルト・シルトで、湿潤で脆弱な地盤であったとみられる。その地盤上には、A期と同様に、土壌(SK3377・3378)、溝(SD3376)、小さな柱穴がみられる。この遺構の構成は、A期と類似する。ただし、A期や後述するC期のような整地は認められないと、先述したように大別3層を境としてそれより上層は遺物の量と種類が大きく増加することから、少なくとも調査区内においてはA期とは異なる土地利用であった可能性が高い。

さらに、溝からは切断痕がみられる鹿角、B期遺構を覆う沢の堆積土(SX3382大別2層)からは楕形津や鉄滓、漆付着土器が出土している。本調査区東側の第84次調査区では、政府第III期の鍛冶工房とみられる堅穴遺構が検出されていることをあわせると、その周辺は鉄器に加え、骨角器や漆製品を製作する場であったことがうかがえる。

3) C期

9世紀後半頃で、政府第IV期に当たる。遺構は10世紀中葉～11世紀中葉の沢の堆積土(SX3382大別1層)に覆われる。地形はB期からの沢の埋積が進み、調査区北東隅と南西部との高低差が1.2mと小さくなり、斜面もやや緩やかになる。

土地利用については、B期遺構を覆う沢の堆積土(SX3382大別2層)の上層が地盤となる。上層の堆積土は、下層よりも水分が少ない乾燥した土壌である。この頃になると比較的乾燥した安定地盤が

形成されていたとみられる。その地盤上のうち、調査区北東側の標高の高い範囲を整地し (SX3379整地層) (註14)、さらにその東端に土壠 (SK3380・3381)、柱穴が造られる。これらの遺構は第84次調査区側に分布が限定されることに加え、整地層上面の標高値は第84次調査区で検出した掘立柱建物群の遺構面と近似することから、その一部であったと考えられる。

また、C期遺構を覆う沢の堆積土 (SX3382大別1層) から出土した鉄・銅製品の製作に関わる遺物や漆付着土器は、本調査区周辺に鉄・銅・漆製品を製作する工房があったことを想定しうる。さらに、陸奥国司が儀礼や饗宴の場で使用したとみられる縁袖陶器の輪花壇や白色土器、儀式で使われたとされる羽釜形土器は、本調査区周辺に陸奥国司が参加する儀礼や饗宴が催される場であったこと、そこで使われる物品の保管施設であったことも想定しうる。また、その施設には特殊な儀礼用の物品が納められていた可能性もある (註15)。本調査区東側の第84次調査の掘立柱建物群が、上記の各種工房や儀礼や饗宴に関わる施設の一部であったことも想定する必要があろう。さらに、本調査区北西・北の丘陵平坦地には、儀式に深い関わりをもつ官衙があるとの推定もある (『年報1976・1977』)。本調査の成果を勘案すると、陸奥国司が参加する儀式や饗宴にかかる場や施設、鉄・銅・漆製品を製作する工房は、この平坦地に広がっていた可能性がさらに高まったといえる (註16)。この場所での遺構検出や土地利用の変遷については、今後の調査で明らかにしていく必要があろう。

なお、これらが廃絶した後の土地利用については、遺構を確認しておらず明らかにしえないが、10世紀末や11世紀中葉の須恵系土器が出土していることから、本調査区周辺はこの頃まで利用されていたことがうかがえる。

註

註1) 同一個体とみられるものでも接合しない破片はそれぞれで数えた。

註2) 縁袖陶器と貿易陶磁の観察・同定にあたっては、大阪大学大学院文学研究科の高橋照彦氏、関西文化財調査会の平尾政幸氏、奈良文化財研究所の尾野善裕氏のご教示を得た (所属: 五十音順)。

註3) 以下、嵯峨天皇と讓位後の嵯峨太上天皇を、嵯峨天皇として記述する。

註4) この『延喜式』の「年料雜器条」に規定された、「瓷器」の寸法・規格と出土縁袖陶器との相關関係は、10世紀よりも9世紀の方がより対応することが指摘されている (高橋1993)。

註5) 関西文化財調査会の平尾政幸氏のご教示による。

註6) 講内系土器の器種分類と年代推定は、奈良国文化財研究所1976、小森・上村1996を参考とした。

註7) 講内系土器の定義については、多賀城市教育委員会の見解を参考とした (多賀城市教育委員会2003)。

註8) 多賀城外の出土例として講内系土器と考えられるものは、市川橋遺跡SX6720河川跡第6層 (宮城県教育委員会2009、報告書第25-4E0172) と高崎跡34次遺構外 (多賀城市教育委員会2002、第19図2) から平城宮分類の楕A類似品各1点。市川橋遺跡水入地区第II層から高杯1点がある (宮城県教育委員会1982、第37図3)。また複数の出土例は市川橋遺跡第26次調査C区西半部の138点がある (多賀城市教育委員会2003)。器種は平城宮分類の類似品として楕A22点、杯A2点、杯B4点、杯AかB8点、壺6点、高杯36点、壺E6点、甕1点があるほか、杯22点、壺30点、壺1点が挙げられている (多賀城市教育委員会2003)

註9) 白色土器の観察・同定にあたっては、大阪大学大学院文学研究科の高橋照彦氏、関西文化財調査会の平尾政幸氏、奈良文化財研究所の尾野善裕氏・神野恵氏のご教示を得た (所属: 五十音順)。

註10~12) 関西文化財調査会の平尾政幸氏のご教示による。

- 註13) 文字資料の観察・収録にあたっては、東北歴史博物館の相澤秀太郎氏のご教示を得た。
- 註14) 整地層の分布について、A期のSK3371は斜面下方、C期のSK3379は斜面上方と異なる。各期の地形に応じた土地利用がなされている。
- 註15) 第28次調査で検出した11世紀初頭以降の堆積層IS08-2層出土の8世紀後半～9世紀前半に製作された供器具の土器群は、五万崎地区の官衙の機能が停止した11世紀初頭頃までのある期間、保管されたとする『年報1976』。9世紀後半～10世紀中葉頃に廻棄された5b層出土の綠釉陶器輪花壺（図版15-5）、綠釉陶器壺（6）、皿（7）、灰釉陶器壺（8）、皿（9）、白色土器（10）なども、製作年代が9世紀前葉頃であることからある程度の期間使用・保管されたこと、このうち綠釉陶器輪花壺（図版15-5）と白色土器（10）は、図版11-2、4のように、廻棄の原位置をある程度留めるに考えられることから、この窯塞や儀礼にかかる物品は9世紀後半～10世紀中葉頃に廻棄されるまで使用・保管されていた可能性も検討する必要があろう。
- 註16) 詳細な時期は述べていないが、第28・29・83次調査では鉄・銅製品を製作する工房が検出されていること（『年報1976・1977・2012』）、第30次調査では漆紙付着土器や漆紙が発見されていることから（『年報1977』）、鉄・漆工房の存在も推定できる。本調査区から上記の調査区にかけて、これらの遺構が分布することも想定される。

引用文献

- 会津若松市教育委員会 1994 『会津大戸窯一遺物編一』 会津若松市文化財調査報告書第37号
- 吾妻俊典 2004 「多賀城とその周辺におけるクロト土器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 pp.187-196
- 小笠原好彦 2016 「近畿地方の八・九世紀の土器群高杯とその流変」『日本の古代宮都と文物』pp.313-327 吉川弘文館（初出は1988年）
- 尾野善裕 2003 「古代の尾張・美濃における綠釉陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の綠釉陶器・生産地の様相を中心にして』 古代の土器研究会第7回シンポジウム pp.20-37
- 尾野善裕 2008 「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』 pp.75-92 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集
- 尾野善裕 2013 「第2節 古代尾張における施釉陶器生産と歴史的背景」『新修名古屋市史 資料編考古2』 pp.824-825
- 関西文化財調査会 2014 『平安京発掘調査報告 左京二条二坊二・三町 冷然院・神祇官町・大炊御門大路・二条城北道路』
- 古代文化調査会 2012 『平安京左京二条二坊二・三町 二条城北道路』
- 子守復寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 財团法人 京都市埋蔵文化財研究所 pp.187-272
- 財团法人京都市埋蔵文化財研究所 1984 「左京二条二坊（2）」『昭和67年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 pp.11-13
- 財团法人京都市埋蔵文化財研究所 1990 『平安京右京三条三坊』 京都市埋蔵文化財調査報告 第10番
- 財团法人京都市埋蔵文化財研究所 2005 『平安京左京二条二坊十町（高陽院跡）』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-7
- 鈴木徳雄 1983 「古代北武藏における土器製作手法の画期」『土曜考古』第7号 pp.13-21
- 鈴木徳雄 1984 「いむゆる北武藏系土器群の動態—古代北武藏における土器生産と交易—」『土曜考古』第9号 pp.47-76
- 多賀城市教育委員会 2002 『高崎遺跡』 多賀城市文化財調査報告書第65集
- 多賀城市教育委員会 2003 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II—』 多賀城市文化財調査報告書第70集 pp.120-124
- 高橋照彦 1993 「防長產綠釉陶器の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 pp.195-228
- 高橋照彦 1997a 「「瓷器」「茶碗」「菓碗」「様器」考—文献にみえる平安時代の食器名を巡って—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp.531-588
- 高橋照彦 1997b 「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集 pp.63-76
- 太宰府市教育委員会 2006 『太宰府条坊跡Ⅲ—陶器分類編—』 太宰府市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告Ⅷ』 奈良国立文化財研究所学報告第26冊
- 平尾政幸 1994 「4 緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』 財团法人 京都市埋蔵文化財研究所 pp.739-758
- 平尾政幸 2016 「1 冷然院北内溝出土土器群の特質」『平成27年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定便備業務報告書 平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品』 pp.53-62 京都市文化市民局

- 古川一明 2014 「古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について」『東北歴史博物館研究紀要』15 pp.1-20
- 宮城県教育委員会 1982 『水入遺跡』 宮城県文化財調査報告書第84集
- 宮城県教育委員会 1994 『山王遺跡八幡地区の調査—県道泉塙釜線開通調査報告書I—』 宮城県文化財調査報告書第162集
- 宮城県教育委員会 2009 『市川橋遺跡の調査』 宮城県文化財調査報告書第218集
- 宮城県教育委員会 2018 『山王遺跡Ⅷ—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—』 宮城県文化財調査報告書第246集
- 村田晃一 2007 「v. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 pp.119-163

III. 付 章

1. 第10次5ヵ年計画の総括

多賀城跡発掘調査の第10次5ヵ年計画は、平成26年度を初年度とし、本年度が最終年である。各年度の実施状況は年度ごとに刊行した年報に記したとおりだが、今年度が計画終了年度にあたることから、ここで第10次5ヵ年計画とその実施状況を総括しておきたい。

(1) 第10次5ヵ年計画の目的

本計画に先行する第9次5ヵ年計画は、多賀城跡外郭施設の正式報告書作成を見据えた外郭南辺と東辺の資料収集を目的として立案され、その実施によって一定の成果を得ることができた。外郭施設については、昭和59～63年の第4次5ヵ年計画で主目的として取り上げたのをはじめ、その後も断続的に調査を行って成果を得ている。しかし、遺構が広範囲に及ぶこと、内容が門・櫓・堀など多岐にわたることから、実態を解明し、正式報告書を作成するには多くの課題が残されている。

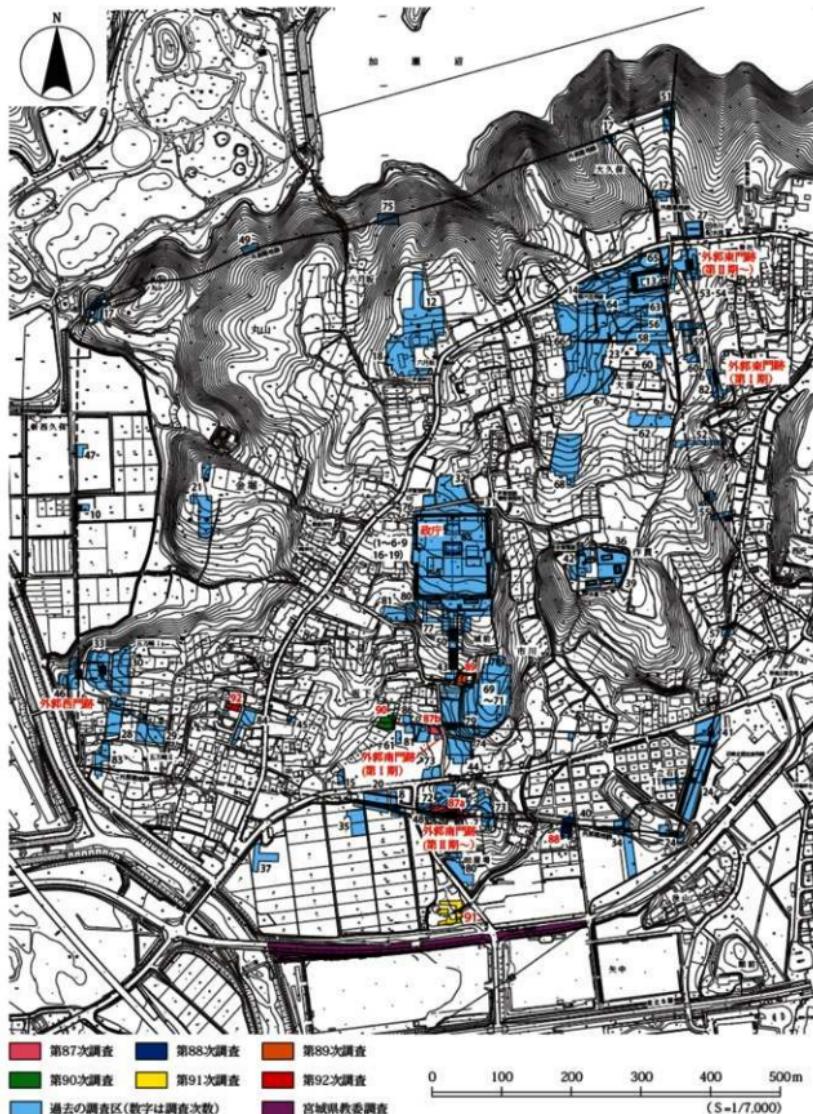
特に、政府第Ⅰ・Ⅱ期(以下、第〇期と略す)の外郭南門と南辺の究明、未検出の第Ⅰ・Ⅱ期外郭西辺の確認、外郭北西隅の区画施設や付属施設の状況把握などが重要な課題としてあげられた。そこで、本計画は南辺と西辺および北西隅の区画施設や付属施設を対象とし、課題の解明と正式報告書作成のためのデータ収集、さらに、環境整備と連動した政府一外郭南門間道路(政府南大路)の補足調査を主目的として立案された。

(2) 第10次5ヵ年計画の実施状況と変更

第10次5ヵ年計画に基づく平成26年度から今年度までの発掘調査の実施状況は第2・5表、図版25のとおりである。調査は、多賀城市が計画する第Ⅱ期外郭南門の復元に伴う周辺調査が急務となつたことから変更せざるをえず、当初に計画した外郭西辺と北辺の調査は先に送ることとした。それらの計画変更については、平成26～29年度の多賀城跡調査指導委員会に諮り、了承を得た。

年 度	次 数	発掘調査対象地区	発掘面積	調 査 の 目 的
平成26年	87次	外郭南辺(田屋場・坂下地区)	1,000m ²	外郭南門・南辺の検討
平成27年	88次	外郭南辺(五万崎地区)	800m ²	外郭南辺の検討
	89次	政府一外郭南門間道路(城前地区)	800m ²	政府一外郭南門間道路の補足調査
平成28年	90次	外郭西辺(五万崎・西久保地区)	1,000m ²	外郭西辺の検討
平成29年	91次	外郭西・北辺(西久保・丸山地区)	1,000m ²	外郭北西隅の検討
平成30年	92次	外郭西・北辺(西久保・丸山地区)	1,000m ²	外郭北西隅の検討

第5表 多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画(当初:平成25年10月31日)



図版25 多賀城跡発掘調査事業第10次5カ年計画発掘調査区の位置

(3) 第10次5ヵ年計画の成果

第10次5ヵ年計画に基づいて実施した調査成果の概要は、以下の①～⑤にまとめられる。

①第Ⅰ期外郭南辺西方で区画施設跡を確認（第87次b・90・92次）

第Ⅰ期の基礎地業と築地塀とみられる積土遺構を確認し（第90次）、同期の外郭南辺が東辺から470m以上続くこと、南辺の区画施設は丘陵部が築地塀、低湿地部分は材木塀と異なる構造の塀で構成されたことがわかった。その西については、延長線上で遺構が確認できなかつたことから、塀の方向が北に振れると考えられた（第92次）。また、政庁南大路西側は区画施設廃絶後に盛土を行つて幅2～3mの通路としており、過去の調査分とあわせて東西57m以上延びることを確認した。

②第Ⅱ期以降の外郭南門跡の規模・構造の把握（第87次a）

第Ⅱ期以降の外郭南門跡SB201の、規模や構造について既知のデータを再確認するとともに、第Ⅱ期のSB201Aは從来の見解より規模が大きく、それに伴う掘込地業から門の方向は発掘基準線にほぼ一致し、第Ⅱ期の火災は門周辺に限られる、といった新たな見知が得られた。

③第Ⅱ期～第Ⅳ期外郭南辺東方で区画施設跡・櫓跡を確認（第88次）

第Ⅱ期以降の外郭南門の東方にある櫓SB3282は、第Ⅱ期末に焼失して第Ⅲ期に再建された。その後、第Ⅳ期に基礎整地や築地塀を含めた全面的な改修が行われ、10世紀初頭前後に再び建替えられている。第Ⅲ期以降は礎石建物となること、壇や張り出しを伴い、各時期を通して瓦葺きであったとみられることから、これまで確認された櫓の中でも格式が高いと考えられた。

④城前地区で政庁南大路と実務官衙の状況把握（第89次）

政庁南大路の規模・構造と城前官衙ii期の西辺を確認した結果、城前官衙の全容がほぼ明らかとなった。特に、8世紀中頃につくられて第Ⅱ期末に焼失したii期官衙は、建物配置に高い計画性が認められ、出土木簡の内容から鎮守府関係の文書業務が行われていたと考えられた。

⑤第Ⅱ期以降の外郭南門前面で南北大路跡を確認（第91次）

第Ⅱ期以降の外郭南門が立地する丘陵南側据部の南北大路は、拡幅前と拡幅後の2時期に大別でき、それぞれの年代の上限は拡幅前が第Ⅱ期外郭南門造営段階もしくはそれ以前、拡幅時が第Ⅲ-2期と考えられた。また、拡幅前の路面は冲積地との境付近で高低差があつたことがわかつた。

以上の成果によって、外郭南辺と政庁南大路・南北大路・外郭南門・城前官衙に関して多くの見知を得ることができた。①では第Ⅰ期の外郭南辺が東西470m以上続くこと、地形によって塀の構造が異なることがわかつた。②・④・⑤では城内から城外へのメインストリートである政庁南大路と南北大路、外郭南門の変遷と構造を明らかにすることができた。③では第Ⅱ期以降の外郭南辺が築地塀であり、それに伴う櫓は規模や建物構造などの点で他辺に較べて格式高い構造が採用されたという見通しが得られた。

また、①～⑤の成果は各年次の年報（『年報2014～2017』）で報告している。このうち、正式報告書は、②外郭南門跡（『外郭I』）、④城前官衙遺構・遺物編（『南面I』）と総括編（『南面II』）を刊行した（本章第4節（2）4）。

2. 関連研究・普及活動

(1) 多賀城跡環境整備事業

平成30年度の多賀城跡環境整備事業は、政府南面地区の総合的な整備を目的とした第10次5ヵ年計画の4年次にあたり（第6表）、事業費78,000千円（国庫補助50%）で下記の環境整備工事を行った。なお、国庫補助金の交付決定時期と造成工事の工程調整により、当初計画していた工事の一部を翌年度に繰り越すこととなった。

①準備工

将来整備予定の政府南大路跡に近接して立っている電力柱1本及び電信柱1本のそれぞれに、東側へ引っ張る支線が設置されていたが、その支線が政府南大路跡の復元工事に支障となることから、一方の電信柱を撤去し、その電信線をもう一方の電力柱に共架させるとともに、残した電力柱の支線を撤去し、その代替として西側に支柱を設置した。

②造成工、法面工

遺構保護および地形復元を目的として造成工を行った。遺構保護盛土は原則として遺構の上60cmの厚さを確保し、政府南大路跡では、路面の東西方向は原則として水平に、南北方向は遺構、地形に合わせて造成を行った。また、城前官衙エリアで将来建物跡表示を行う箇所は、建物範囲の地盤面を水平にし、そこから周辺地形に安定勾配で擦り付けた。造成斜面には法面工として野芝を張り付ける。

③擁壁工

政府南大路跡の南半部で将来予定している石垣表示に先行して、石垣の補強のため、背面にテールアルメ工法（帶鋼補強土）による補強土壁工を行った。

④雨水排水工

地区内の雨水排水のため、排水溝、暗渠、集水樹を設置した。流末は整備地区の西側を通る市道の道路側溝に接続し、既存の側溝等を経て排出する計画である。

年　度	整備地区	計画内容	対象面積
平成27（2015）	政府南面地区	政府南大路跡復元舗装、総合解説広場補修	24,000m ²
平成28（2016）		政府南大路跡復元舗装、地形測量	
平成29（2017）		基盤整備工、実施設計	
平成30（2018）		造成工、法面工、擁壁工、雨水排水工	
平成31（2019）		政府南大路跡石垣復元、遺構表示工	

第6表 多賀城跡環境整備事業第10次5ヵ年計画

（平成30年度までは実績、平成31年度は計画）

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更する際には、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡に影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。平成30年度における現状変更は、昨年度の申請で工事が未着手だった2件(第7表1~2)と、今年度に申請があつた5件(3~7)を扱った。

昨年度申請案件のうち、1は工事立会の結果、擁壁の基礎は現代の盛土内に納まることを確認した。2は盛土造成の着手前に確認調査を実施したところ、明確な遺構は検出されなかつたが、当該地での古代の遺構面の深さに係るデータを取得することができた。3は過去の台風で崩壊した個人宅地の法面に対し、当初、擁壁設置を計画していたが、実施段階で擁壁から植生マットをアンカーピンで留めて法面を保護する工法に変更したものである。施工に伴て法面上端部の高まつた部分を撤去する計画であつたため事前の確認調査を行うこととして、高まりを一部掘削したところ、表土下で地山面が露出したことから、それ以上の掘削を止めて遺構面の保護を図つた。法面整形部では顕著な遺構は確認されなかつた。

4は住宅改築に伴うものであるが、既存住宅の建築(昭和47年)の際に実施した確認調査の補足調査を行い、遺構確認面の標高等のデータを取得した。今回の工事では遺構確認面を保護するため盛土した上に住宅を建築することとなつた。

5、6については工事の立会を行い、いざれも掘削は現代の盛土内に納まつており、史跡の保存上影響は軽微であることを確認した。

なお、7については来年度実施される見込みである。

番号	変更事項	申請者	変更箇所	申請	文化庁・県教委許可	対応
1	擁壁設置工事	個人	多賀城市市川字作貫1-2・3	平成29年 6月15日	29受付第4号-0735 平成29年9月15日	工事立会 平成30年11月2~3日
2	盛土造成工事	個人	多賀城市高崎1-90-1	平成30年 2月14日	29受付第4号-02095 平成30年4月20日	確認調査 平成30年5月10日
3	擁壁設置	個人	多賀城市市川字五万崎57	平成30年 4月9日	30受付第4号-0175 平成30年5月18日	発掘調査 平成31年1月8日
4	住宅改築	個人	多賀城市市川字大畠33-2	平成30年 4月16日	30受付第4号-0233 平成30年6月15日	発掘調査 平成30年8月21日
5	住宅除却	個人	多賀城市市川字五万崎22-4	平成30年 4月24日	30受付第4号-0239 平成30年6月15日	工事立会 平成30年8月6日
6	カーポート設置	個人	多賀城市市川字五万崎25	平成30年 10月9日	30受付第4号-0221 平成30年11月16日	工事立会 平成30年12月20日
7	浄化槽設置	個人	多賀城市市川字大畠28-2	平成31年 1月8日		発掘調査

第7表 平成30年度現状変更一覧

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城櫓及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続している。平成21年度からは多賀城創建期の窯跡群の発掘調査を実施し、造瓦体制とその社会的背景の解明を主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第8次5ヵ年計画を進めていたが、東日本大震災による復旧事業を優先するため、3年次目の平成23年度から当面の間は事業を休止している。再開にあたつては従来の計画を継続し、大崎市大吉山瓦窯跡の発掘調査に着手する予定である。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査で検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は、城柵と同様に古代の城として位置づけられる岡山県総社市鬼ノ城山、香川県高松市屋嶋城や、建物の礎石が良好に残っている岡山県総社市備中国分寺・国分尼寺、香川県高松市讃岐国分寺・国分尼寺の調査を行い、遺構の理解や調査方法についての基礎資料を得た。また、中央から多賀城に至る古代東山道に設置された玉前駅家の可能性がある岩沼市原遺跡、多賀城の終末期と関連する金ヶ崎町鳥海柵を現地調査し、遺構の保存にかかる調査データを収集した。

(5) その他

1) 宮城県内の震災復興事業に伴う発掘調査の支援

各地域の早期復興を目指し、発掘調査の支援に職員1名を常時派遣した。

高橋 透 平成30年4月1日～平成31年3月31日

2) 現地説明会の開催、見学会などへの対応

発掘調査の成果を一般に公開するため、調査の進捗状況をホームページに随時掲載するとともに、多賀城跡第92次発掘調査の現地説明会及び報道発表を行った。

生田和宏・村上裕次 平成30年11月3日

また、京都橘大学の史跡見学等に関して説明を行った。

3) 資料の閲覧・貸出などに関する協力

以下の機関・団体等への資料の閲覧・貸出などに際し、準備・説明等をした。

会津美里町教育委員会、愛知県陶磁美術館、因幡万葉歴史館、(株)光文社、相模の古代を考える会、(株)数研出版、(株)小学校館、須賀川市教育委員会、多賀城市教育委員会、多賀城市立図書館、東北学院大学、東北歴史博物館、宮城県考古学会、山梨県立博物館

4) 各機関・委員会などへの協力

古川一明 秋田市秋田城跡環境整備委員会委員、秋田県払田跡県境整備審議会委員、盛岡市志波城跡史跡整備委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、多賀城市文化財保護委員会委員、史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員、岩沼市原遺跡調査検討委員、古代城柵官衙遺跡検討会世話人代表

白崎恵介 釜石市橋野高炉跡史跡整備検討委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、松島町文化財保護委員会委員、亘理町三十三間堂遺跡整備計画検討委員会委員、松島町景観審議会委員、右巻市近代建築保存整備調査研究専門委員会委員

生田和宏 塩釜市文化財保護審議会委員

白崎恵介・生田和宏・村上裕次 栗原市入の沢遺跡空中写真撮影協力

村田晃一・生田和宏・村上裕次 栗原市伊治城跡空中写真撮影協力

5) 講演会・研究会などへの協力・執筆

古川一明「奥羽連絡路と烽の道」 平成30年度 最上街道研究会 加美町宮崎福祉センター 平成30年4月14日

古川一明「みやぎ・東北の歴史とこれから」

平成30年度 宮城県私立小中高等学校保護者会連合会研修会 仙台ガーデンパレス 平成30年6月8日

村上裕次「旧石器時代」 平成30年度宮城県考古学会 東北大 平成30年5月13日

村上裕次「II.旧石器時代」(分担執筆)『宮城考古学』第20号 平成30年5月13日

村田晃一「陸奥中部における陶硯の生産と流通(1)」『宮城考古学』第20号 平成30年5月13日

高橋 透「陸奥国府城における10世紀の土器様相」『宮城考古学』第20号 平成30年5月13日

村上裕次「入の沢遺跡について」仙台市富沢遺跡保存館平成30年度ボランティア養成講座		
地底の森ミュージアム	平成30年6月3日	
生田和宏「多賀城跡第91次発掘調査」平成29年度多賀城市遺跡調査報告会		
多賀城市民活動サポートセンター	平成30年6月23日	
村上裕次「溝で囲まれた古墳時代の集落—宮城県北部の最近の調査成果—」平成30年度岩手県考古学会		
奥州市埋蔵文化財センター	平成30年7月7日	
生田和宏「出土文字資料の調査(実技)」宮城学院女子大学学芸員課程特別授業	宮城学院女子大学	平成30年7月23日
古川一明「古代東北・関東地方の大型土塁と烽燈」	第57回古代山城研究会	平成30年9月1日
古川一明「古代東北38年戦争」平成30年度 古代加美石を考える会講演会	加美町宮崎福祉センター	平成30年9月9日
高橋 透「多賀城における調査・研究の現状」相模の古代を考える会	えびな市民活動センター	平成30年9月29日
白崎恵介「多賀城廐跡の調査と整備の歴史」『遺跡学研究』 第15号		平成30年10月15日
古川一明「郡山遺跡と多賀城」 平成30年度 松寿大学公開講座 仙台市八木本市民センター		平成30年10月25日
白崎恵介「国特別史跡多賀城跡附寺跡の保存と活用」『考古学ジャーナル』10月臨時増刊号No.718, 2018		平成30年10月30日
村田晃一「陸奥海道南部と多賀城・石城国と磐城郡・菊多郡・曰理郡・多賀城跡をめぐる考古学的成果から」 いわきの考古学講座 いわき市生涯学習プラザ		平成30年11月17日
白崎恵介「文化財庭園について」日本造園学会東北支部文化財庭園見学会	旧有備館庭園・齋藤氏庭園	平成30年11月18日
生田和宏「多賀城跡第92次発掘調査」平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会報告	東北歴史博物館	平成30年12月4日
白崎恵介「多賀城跡環境整備のパックヤード」東北歴史博物館友の会パックヤードツアーア	多賀城跡政府南面地区環境整備工事現場	平成30年12月12日
古川一明「多賀城における文化遺産マネジメント」	東北芸術工科大学	平成30年12月19日
古川一明「古代の櫓状建物跡と庇付建物跡」		
平成30年度国指定史跡鳥海柵跡シンポジウム 金ヶ崎町中央生涯学習センター		平成31年2月9日
生田和宏「多賀城跡第92次調査」第45回古代城柵官衙遺跡検討会成果報告	東松島市コミュニティーセンター・ホール	平成31年2月16日
古川一明「色麻古墳群」	第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料集	平成31年2月16日
村田晃一「城生柵跡、羽場遺跡」「壇の越遺跡、早風遺跡」「東山官衙遺跡」		
	第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料集	平成31年2月16日
生田和宏「葉切谷廐寺」「一の間遺跡」「一里塚遺跡」	第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料集	平成31年2月16日
村上裕次「多賀城跡」「山王・市川橋遺跡」	第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料集	平成31年2月16日
高橋 透「別所横穴墓群」「菅谷道安寺横穴墓群」「田屋場横穴墓群」	第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料集	平成31年2月16日
白崎恵介「多賀城跡政府南面地区的整備」多賀城市観光協会開光ボランティアガイド連絡会議	多賀城市民活動サポートセンター	平成31年2月25日

6. 連携大学院

東北大大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

古川 一明(客員教授)

文化財科学研究演習

古川 一明(客員教授)・村田 晃一(客員准教授)

文化財科学研究実習II

3. 組織と職員

(宮城県教育委員会行政組織規則(抄))

第13条の五 文化財課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城附寺跡（これに関連する遺跡を含む。以下同じ）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。

二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。

三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。

四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

(職員)

所 長 管理部長
古川 一明 牛渡 弘信

《研究班》	
上席主任研究員(班長)	白崎 恵介
上席主任研究員	村田 晃一
副主任研究員	生田 和宏
研究員	村上 裕次
技 師	高橋 透
《管理班》	
次 長(班長)	高橋 則行 [博物館兼務]
次 長	高橋 伸昭 [博物館兼務]
主 任 主 査	小野寺祐子 [博物館兼務]
主 事	四野見 聰 [博物館兼務]
主 事	渡邊 未希 [博物館兼務]

4. 沿革と実績

(1) 宮県多賀城跡調査研究所の沿革

期 月	事 件
大正11. 10	多賀城跡が名勝天然記念物保存法により史跡指定（大正11.10.12、指定名称「多賀城跡（寺跡）」）
昭和35	多賀城跡が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織し、5年かけてによる多賀城跡の発掘調査の初年度事業として多賀城跡と多賀城寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城寺跡の発掘調査実施（宗教委託事業）
37. 8	多賀城寺跡の発掘調査実施（宗教委託事業）
38. 8	多賀城跡政府地区発掘調査（第1次）開始。以後40年8月（第3次）まで実施。政府地区の領官院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡政府地区別引領に際して指定（昭和41.4.1）
43. 11	多賀城町から多賀城跡政府地区の発掘調査（第4次）を再開
44. 4	宮城県多賀城跡調査研究会設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置（委員長伊東信雄）。
44. 10	色葉村白川の山田御殿の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡発掘調査報告書』（多賀城跡第1回）刊行
45. 4	研究会による多賀城跡発掘調査実施
48. 10	企画地区（寺跡）を象とした第2回（発掘調査）に計画様文断層を発見
49. 2	多賀城寺跡の追加指定を公報告示（昭和49.2.18）
49. 4	多賀城跡政府地区発掘調査事業開始
49. 8	桃ノ城跡の発掘調査に着手（昭和50年度まで継続）
49. 8	プレーブ亭から東北歴史資料館の建物に移転
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手（昭和54年度まで実施）
53. 4	研究会・料・同前二科の学科となる。遺跡調査研究事業開始
53. 6	津波文書の発見を報告実施。これにより研究者が山本社一郎知事から表彰を受ける
54. 3	多賀城跡調査研究会（研究会）『多賀城跡文庫』刊行
55. 3	『多賀城跡－行政令施行規則』刊行
55. 3	総合道路の追加指定を公報告示（昭和55.3.24）
55. 7	佐治道路の発掘調査に着手（昭和56年度まで継続）。初年度の調査で8世紀初頭の宮衙中腹門を検出
57. 3	『多賀城跡－行政令本文編』刊行
58. 11	第43・44次調査で政府方面の道路構築見聞
59. 3	多賀城跡南北地域の追加指定を公報告示（昭和59.3.27）
60. 9	札幌越冬地選定会議実施
61. 8	和田道跡の発掘調査に着手（平成10年度まで継続）
62. 8	化政官衙跡の史跡指定（公報告示）
62. 11	第53回調査で奈良時代の外郭門門を発見
平成 2. 6	桃ノ城跡の追加指定を公報告示（平成2.6.28）
2. 11	多賀城跡調査研究指導委員会（内閣・政府間協議適用専門部会を設置）
4. 11	日本考古学会の「かた」（古文書）について報道発表
5. 8	下野原御殿跡の調査を実施し、3回目の多賀城跡建瓦実跡を発見
5. 9	山下道跡千手田堀跡の追加指定を公報告示（平成9.22）
6. 8	桃ノ城跡の発掘調査を再開（平成13年度まで継続）。政府の全貌を解明
7. 6	第6回調査指導委員会において内閣・政府間協議適用の実施承認
9. 11	多賀城跡の解体文書（古文書）の解説が官報告示（平成19.6.30）
10. 6	多賀城跡の重要文化財（古文書）指定が官報告示（平成19.6.30）
11. 1	和田官衙遺跡の史跡指定（公報告示）
11. 4	2年目が終り、研究会となる
11. 4	東北地方史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通じて東北古代史の解明に尽くした功績」により第5回河北文化賞を受賞
14. 8	鬼岩道跡の発掘調査に着手（平成14年度まで継続）
15. 3	『多賀城跡・奈良のあらわし』刊行
15. 6	『伊治城跡の発掘調査』（公報告示）
16. 4	多賀城政府地区的再整備に立ち入り、政府地区的調査に着手（平成20年度まで継続）
16. 5	和田官衙跡の発掘調査に着手（平成20年度まで継続）
17. 4	多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県民間団体により多賀城跡調査研究会を設置
19. 8	白川山御納戸群の発掘調査に着手（平成22年度まで継続）
20. 4	多賀城政府地区的再整備に着手（平成22年度まで継続）
22. 3	『多賀城跡－政府令補遺稿』刊行
22. 9	多賀城跡発掘調査50周年記念事業を開催
22. 10	『多賀城跡・奈良のあらわし2010』刊行
22. 11	第68回調査で第1回の外郭門門を新たに発見
23. 3	多賀城跡調査研究会（研究会）『多賀城跡本蔵』刊行
24. 5	和田大賀隣の復旧工事に伴い、政府正殿跡を調査。宝龜11（780）年の火災による焼失と建替えを確認
25. 3	多賀城跡調査研究会（研究会）『多賀城跡本蔵』刊行
26. 2	多賀城出土木簡と多賀城出土津波文書の核査定有形文化財（古文書）指定が公報告示（平成26.2.28）
26. 3	多賀城跡調査研究会（研究会）『多賀城跡本蔵』刊行
28. 2	桃ノ城跡行方不明画展実施
28. 2	特別史跡多賀城跡の跡常識基本計画を策定
29. 3	『多賀城跡－奈良のあらわし』刊行
30. 3	『多賀城跡－政府南面地区・城宮宮内遺跡・遺物編』刊行
31. 3	『多賀城跡－政府南面地区・城宮宮内遺跡編』刊行

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査の実績

計画	年度	次数	発掘調査地区	実施面積(m ²)	経費(千円)	計画	年度	次数	発掘調査地区	実施面積(m ²)	経費(千円)
						第1次5ヵ年計画	第2次5ヵ年計画	第3次5ヵ年計画	第4次5ヵ年計画	第5次5ヵ年計画	第6次5ヵ年計画
昭和44	5次	政厅地区・南東部	1,990			平成元	56次	大畠地区・北半部	1,550	29,069	
	6次	政厅地区・北東部	2,079	9,000		平成元	57次	外郭東辺海面付(西沢地区)	500		
	7次	外郭南辺中央部(多賀城碑付)	264			平成2	58次	大畠地区・中央部	1,470	30,069	
	8次	外郭南辺中央部	250			平成3	59次	大畠地区・中央部東側	900		
	9次	政厅地区・南西部	2,046		12,000	平成4	60次	大畠地区・中央部	1,450		
	10次	外郭西辺中央部	495			平成4	61次	鴻の池地区	150	30,069	
	11次	外郭東辺中央部	660			平成5	62次	大畠地区・南半部	1,390		
	12次	外郭中央地区・北西部	3,795			平成5	63次	大畠地区・北半部	1,700	35,000	
	昭和46	外郭東辺門付付近	1,690	12,000		平成6	65次	外郭東辺門付・現状変更に伴う調査	3,000	35,000	
	14次	外郭東辺門北端	2,096			平成7	66次	大畠地区・北西面	3,000	35,000	
昭和47	15次	清の池周辺	112			平成7	67次	大畠地区・西面	3,000	35,000	
	16次	政厅地区・北半部	1,320		13,000	平成9	68次	大畠地区・西端・多賀城碑	2,550	36,000	
	17次	外郭北・北隅・北西隅	1,729			平成10	69次	城塁増築・南端	2,000	36,000	
	18次	外郭中央地区・北端	2,937			平成11	70次	城塁地区・南部	2,000	37,750	
	19次	政厅地区・北西部	2,640			平成12	71次	城塁地区・南部	2,000	32,300	
	20次	外郭南辺中央部	990		17,000	平成13	72次	南門西側通路跡・南門・政厅間道路跡	1,000	28,960	
	21次	外郭西辺門中央部	1,495			平成14	73次	南門東側通路跡・南門・政厅間道路跡	1,800	26,000	
	22次	城外南方(高木遺跡)	3,465			平成15	74次	南門・政厅間道路跡	1,000	25,220	
	23次	外郭東地区・北端(大畠)	3,300			平成16	76次	外郭北辺中央部	500		
	24次	外郭南・北隅	2,640	17,000		平成17	77次	政厅東臨縦・後縦・北辺地区	1,640	24,460	
昭和48	25次	多賀城跡寺崎南門付推定地	2,310			平成18	78次	政厅東棟柱・西臨縦・南塀地区	970	23,720	
	26次	多賀城跡寺崎中門付推定地	2,310	22,000		平成19	79次	政厅・外郭南門間道路・城崩・浦野地区	2,200	36,610	
	27次	春社宮・郡陽市川人大久保地区	660			平成20	80次	城塁裏地区・政厅南西地区	930	12,750	
	28次	五方崎地区	2,310		22,000	平成21	81次	浦・池地区・政厅南西地区	900	12,060	
	29次	五方崎地区	2,310	22,000		平成22	82次	外郭東辺伊吹石地区	580	11,460	
	30次	五方崎地区	1,980			平成23	83次	外郭南辺石万崎地区	960	11,447	
	31次	政厅北・隣接地区	1,980			平成24	84次	外郭南辺三万崎地区	445	11,294	
	32次	政厅北・隣接地区	1,990		22,000	平成25	86次	外郭南辺下地区	350	10,360	
	33次	外郭西門地区	1,990			平成26	87次	外郭東辺山岸・坂下地区	910	9,901	
	34次	若山地区・南低窪地	1,300			平成27	88次	外郭南辺立石地区	390		
昭和49	35次	浦の池南地区	990	30,000		平成28	89次	政厅南人頭・城崩地区	280	9,424	
	36次	外郭東地区中央部作貫地	1,890			平成29	90次	外郭南辺下地区	430	9,224	
	37次	多賀城跡南端(砂押川東岸)地区	700	36,000		平成30	91次	外郭東門三屋堀地区(南北大堀)	720	10,347	
	38次	作貫南端低窪地(點急勾配)	50						200	9,549	
	39次	外郭東地区中央部作貫地	2,590	35,000							
	40次	外郭東・築堤東・中央部(立石地区・斜削)	80								
	41次	外郭東・築堤東・中央部(立石地区・斜削)	1,290		32,000						
	42次	外郭東地区中央部(作貫地)	590								
	43次	外郭中央地区中央部(政厅南方)	890								
	44次	外郭中央地区中央部(政厅南方)	2,590	32,000							
昭和50	45次	坂下地区	70								
	46次	外郭西門地区	750	28,000							
	47次	外郭西辺中央部	1,600								
	48次	外郭南門地区	890		28,000						
	49次	外郭北・推定地	450								
	50次	政厅南地区	990								
	51次	外郭北・北隅東地区	500	28,000							
	52次	大畠地区及び東の外の地区	500		28,000						
	53次	外郭東門・北東地区	1,600								
	54次	外郭東門東地区	1,600		28,000						
昭和51	55次	外郭東辺中央部(作貫地)	500	28,000							

調査面積合計	118,773m ²
調査費用累計	1,154,853千円
指定地盤面積	約1,070,000m ²
調査面積/地盤面積	約11%

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費 (千円)	計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費 (千円)	
第1次5ヵ年計画	昭和45	行政地区	南門裏虎崎・東脇駒崎表示工	10,000	第7次5ヵ年計画	平成12	柏木遺跡	造成工・排水工・法面保護工	14,495	
	昭和46		正殿跡・築地御跡表示工	20,000		平成13		法面工・園路工・植栽工・排水工	19,799	
	昭和47		西脇駒崎・塩地御跡表示工	25,000		平成14		法面保護工・園路工	9,399	
	昭和48		北西門跡・塩地御跡表示工	20,000		平成15		法面工・道構表示工・園路工・植栽工	9,020	
	昭和49	外郭東門地区	東門跡・聖穴(尼崎表示工)	20,000		平成16		園路広場工・排水工・植栽工・樹木植栽	8,266	
	昭和50	外郭東南隅地区	木質遺構保存復旧設置工	20,000		平成17	室内板・柱柱整備	室内板柱柱設置工・瓦器サイド整備工	15,738	
	昭和51		塩地痕貫工・園路工	10,000		平成18	(木造再整備)	基礎整備工・広場工・自然育成工	11,094	
	昭和52	滝の池地区	南辺地御跡表示工	16,000		平成19		擁土工・芝生工・施設設置工・自然育成工	9,462	
	昭和53		多賀城跡河川修復工	16,000		平成20	政庁地区再整備	塩地駒崎お工	8,704	
	昭和54	南門地区	南門跡・塩地御跡保護工	20,000		平成21		塩地駒崎お工	8,509	
第2次5ヵ年計画	昭和55	南門地区	園路工・便益施設工・緑化修景工	30,000		平成22		追加道構表示工・(西駒崎)	8,084	
	昭和56	外郭南東地東半部	緑化修景工	30,000		平成23		追加道構表示工・(東駒崎)	8,104	
	昭和57	西野(資料館・南門)	園路工・便益施設工・緑化修景工	28,000		平成24		追加道構表示工・(後路)	7,956	
	昭和58	作貫地区	地形修復工・便益施設工・緑化修景工	30,000		平成25		敷地造成工・(北駒崎)	7,569	
	昭和59		土堀跡及び笠置崎表示工・便益施設工	27,000		平成26		追加道構表示工(北駒崎)	8,636	
	昭和60	作貫地区	道構駒崎表示工・便益施設工・緑化修景工	27,000		平成27	政庁南大路・解説板・休憩施設再整備	政庁南大路・解説板・休憩施設再整備	8,193	
	昭和61	作貫地区	地形修復工・道路復元工・緑化修景工	27,000		平成28		政庁南大路再整備・地形測量	13,090	
	昭和62		畜跡修復工・便益施設工・緑化修景工	27,000		平成29		構物駒馬工・実施設計	15,000	
	昭和63	作貫地区北端・北西隅部	便益施設工・園路工・緑化修景工	27,000		平成30		基礎整備(造成工・雨水排水設置工)	78,000	
第3次5ヵ年計画	平成元	北切削K南北半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	27,112		平成31		政庁南大路石垣復元・排水工・計画		
	平成2	北切削K北半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	30,000	官城城による整備面積(平成30年度)	官城城による整備面積(平成30年度)				
	平成3		便益施設工・園路工・緑化修景工	30,000		多賀城跡 154.812m ²				
	平成4		便益施設工	30,000		政庁地区 26,011m ²				
	平成5	東門・大堀地区東側	地形修復工・園路工・緑化修景工	35,000		六月版地区 9,335m ²				
	平成6	東門・大堀地区西側	建物跡表示工・便益施設工	35,000		南辺地地区 18,462m ²				
	平成7		道路跡表示工・塩地御跡表示工・便益施設工・緑化修景工	30,000		南門地区・南辺西地区 13,824m ²				
	平成8		地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	30,000		作貫地区・東辺地区 27,934m ²				
第4次5ヵ年計画	平成9	南門地区	多賀城跡復元工・便益施設工	51,000		北切削K 33,947m ²				
	平成10	東門・大堀地区西側	道路跡表示工・便益施設工・緑化修景工	35,000		東門・大堀地区 25,299m ²				
	平成11	西側北半部	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	31,500		柏木遺跡 3,759m ²				
					整備事業費総計 1,072,061円					

3) 多賀城間連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年 度	遺 跡 名	事 業	内 容	発掘面積 (m ²)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5カ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次5カ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 閑連城跡調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000
第4次5カ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊野窯跡群	地形図作成・発掘調査	多賀城創建窯跡調査	600	14,000
第5次5カ年計画	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第6次5カ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	16,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第7次5カ年計画	平成16	木戸窯跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	木戸窯跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸窯跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	3,520
	平成20	日の出山窯跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
第8次5カ年計画	平成21	日の出山窯跡群	第1次調査	F地点南側の調査	490	3,168
	平成22	日の出山窯跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成23	大吉山瓦窯跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成24	大吉山瓦窯跡群	休止		0	0
	平成25	大吉山瓦窯跡群	休止		0	0

4) 研究成果等刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報1969』(第5・6・7次調査)	昭和45年3月	『年報1994』(第65次調査、環境整備)	平成7年3月
『年報1970』(第6・9・10・11次調査)	昭和46年3月	『年報1995』(第66次調査)	平成8年3月
『年報1971』(第7・13・14次調査)	昭和47年3月	『年報1996』(第67次調査)	平成9年3月
『年報1972』(第15・16・17・18次調査)	昭和48年3月	『年報1997』(第68次調査、多賀城跡復原解説修理)	平成10年3月
『年報1973』(第19・20・21・22次調査)	昭和49年3月	『年報1998』(第69次調査)	平成11年3月
『年報1974』(第23・24次調査)	昭和50年3月	『年報1999』(第70次調査)	平成12年3月
『年報1975』(第25・26・27次調査、東外部縄張部)	昭和51年3月	『年報2000』(第71次調査)	平成13年3月
『年報1976』(第28・29次調査)	昭和52年3月	『年報2001』(第72次調査、環境整備)	平成14年3月
『年報1977』(第30・31次調査)	昭和53年3月	『年報2002』(第73次調査)	平成15年3月
『年報1978』(第32・33次調査、環境整備)	昭和54年3月	『年報2003』(第74・75次調査)	平成16年3月
『年報1979』(第34・35次調査、環境整備)	昭和55年3月	『年報2004』(第76次調査)	平成17年3月
『年報1980』(第36・37次調査)	昭和56年3月	『年報2005』(第77次調査、環境整備)	平成18年3月
『年報1981』(第38・39・40次調査)	昭和57年3月	『年報2006』(第78次調査)	平成19年3月
『年報1982』(第41・42次調査)	昭和58年3月	『年報2007』(第79次調査)	平成20年3月
『年報1983』(第43・44次調査)	昭和59年3月	『年報2008』(第80次調査)	平成21年3月
『年報1984』(第45・46・47・48次調査、環境整備)	昭和60年3月	『年報2009』(第81次調査)	平成22年3月
『年報1985』(第49・50・48・51次調査)	昭和61年3月	『年報2010』(第82次調査、環境整備)	平成23年3月
『年報1986』(第49・50・51次調査)	昭和62年3月	『年報2011』(第83次調査)	平成24年3月
『年報1987』(第50・52・53次調査)	昭和63年3月	『年報2012』(第84・85次調査)	平成25年3月
『年報1988』(第54・55次調査)	平成元年3月	『年報2013』(第86次調査)	平成26年3月
『年報1989』(第56・57次調査)	平成2年3月	『年報2014』(第87次調査)	平成27年3月
『年報1990』(第58・59次調査)	平成3年3月	『年報2015』(第88・89次調査、環境整備)	平成28年3月
『年報1991』(第60・61次調査)	平成4年3月	『年報2016』(第90次調査)	平成29年3月
『年報1992』(第62・63次調査)	平成5年3月	『年報2017』(第91次調査)	平成30年3月
『年報1993』(第64次調査)	平成6年3月	『年報2018』(第92次調査)	平成31年3月

②多賀城跡開発跡調査報告書

『桃之城跡I』	多賀城開拓跡調査報告書第1冊	昭和50年3月	③研究紀要
『桃之城跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第2冊	昭和51年3月	『研究紀要Ⅰ』
『伊治城跡I』	多賀城開拓跡調査報告書第3冊	昭和52年3月	『研究紀要Ⅱ』
『伊治城跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第4冊	昭和53年3月	『研究紀要Ⅲ』
『伊治城跡III』	多賀城開拓跡調査報告書第5冊	昭和54年3月	『研究紀要IV』
『乍々城道跡I』	多賀城開拓跡調査報告書第6冊	昭和55年3月	『研究紀要V』
『乍々城道跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第7冊	昭和56年3月	『研究紀要VI』
『乍々城道跡III』	多賀城開拓跡調査報告書第8冊	昭和57年3月	『研究紀要VII』
『乍々城道跡IV』	多賀城開拓跡調査報告書第9冊	昭和58年3月	『研究紀要VIII』
『乍々城道跡V』	多賀城開拓跡調査報告書第10冊	昭和59年3月	『研究紀要IX』
『乍々城道跡VI』	多賀城開拓跡調査報告書第11冊	昭和60年3月	『研究紀要X』
『東山城跡I』	多賀城開拓跡調査報告書第12冊	昭和61年3月	④調査報告書・資料集
『東山城跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第13冊	昭和62年3月	『多賀城跡 政令跡 地図編』
『東山城跡III』	多賀城開拓跡調査報告書第14冊	昭和63年3月	『多賀城跡 政令跡 碼道編』
『東山城跡IV』	多賀城開拓跡調査報告書第15冊	平成元年3月	『多賀城跡 南門地区』
『東山城跡V』	多賀城開拓跡調査報告書第16冊	平成2年3月	『多賀城跡 宮守町南面地区』
『東山城跡VI』	多賀城開拓跡調査報告書第17冊	平成3年3月	『多賀城跡 宮守町北面地区』
『東山城跡VII』	多賀城開拓跡調査報告書第18冊	平成4年3月	平成30年3月
『下宇摩野城跡』	多賀城開拓跡調査報告書第19冊	平成5年3月	『多賀城跡 宮守町北面地区』
『桃之城跡III』	多賀城開拓跡調査報告書第20冊	平成6年3月	『多賀城跡 宮守町南面地区』
『桃之城跡IV』	多賀城開拓跡調査報告書第21冊	平成7年3月	『多賀城跡 宮守町北面地区』
『桃之城跡V』	多賀城開拓跡調査報告書第22冊	平成8年3月	平成31年3月
『桃之城跡VI』	多賀城開拓跡調査報告書第23冊	平成9年3月	『多賀城跡 文書編』
『桃之城跡VII』	多賀城開拓跡調査報告書第24冊	平成10年3月	『多賀城跡 文書編』
『桃之城跡VIII』	多賀城開拓跡調査報告書第25冊	平成11年3月	『多賀城跡 文書編』
『桃之城跡IX』	多賀城開拓跡調査報告書第26冊	平成12年3月	『多賀城跡 文書編』
『桃之城跡X』	多賀城開拓跡調査報告書第27冊	平成13年3月	平成32年3月
『龟岡城跡I』	多賀城開拓跡調査報告書第28冊	平成14年3月	『多賀城跡 古代東北』
『龟岡城跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第29冊	平成16年3月	昭和64年3月
『木戸室跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第30冊	平成17年3月	『多賀城跡 古代東北』
『木戸室跡III』	多賀城開拓跡調査報告書第31冊	平成18年3月	平成23年3月
『木戸室跡IV』	多賀城開拓跡調査報告書第32冊	平成19年3月	平成25年3月
『六月坂道跡II』	多賀城開拓跡調査報告書第33冊	平成20年3月	平成26年3月
『日出山塁跡群I』	多賀城開拓跡調査報告書第34冊	平成21年3月	昭和60年3月
『日出山塁跡群II』	多賀城開拓跡調査報告書第35冊	平成22年3月	平成15年3月
『日出山塁跡群III』	多賀城開拓跡調査報告書第36冊	平成23年3月	平成22年9月

報 告 書 抄 錄